

十二月十二日

摂州兵庫 松平大膳太夫

大坂川口転法松平内蔵頭

大坂目印山 松平相模守

摂州住吉 松平土佐守

摂海防禦兼而勤仕候儀有之候処、攘夷御一決之上は、
蛮夷渡来之風聞頻ニ有之候、弥御守衛等行届 帝都御
氣遣之筋無之候哉、御尋被為在候、且又万一小船を以
淀川筋登来候節、防禦打止之ヶ所手配等茂、以書付委
細早々可有言上事、

右四藩は、兼々警衛承居候付、別以 御沙汰之事、

一言同上、添此一紙、

一山城国口々

一京師口々

一神崎川末

右防禦心得方之事、

以上、上々京諸藩江

御沙汰之事、

一尤其藩々々より、以一紙言上可有之事、

右十二月十三日飛鳥井殿より相廻ル、

右昨日学院ニ而御達之写

謹奉捧一書候、嚴寒之候ニ御座候処、倍御安全被為成
御座、恐賀之至奉存上候、然は先達而高崎猪太郎参上
仕候節、段々

御懇厚 御内諭被成候趣、猪太郎より逐一申達、謹而
奉拝承、難有仕合奉存候、天下危難之秋ニ当り、不学
無術之小臣重職ヲ汚し罷在、奉辱

勅任候儀も可有御座欵と、夙夜不堪恐惶候得共、切迫
之機會、陳謝仕居候時にも無御座候故、唯々

皇国之為に一身を抛ち、誠赤を以奉報

叡旨と存詰候より外何等之術計も無御座候、就而は、

島津三郎儀は、国忠抜群之者にも御座候故、此度

勅使を以被仰下候御儀も計議仕度と、猪太郎へ申含指

越候事ニ御座候、委細は従同人可奉達

尊聰被奉存候、此度

勅使ニ付而は、何角御斟酌被為思召候哉ニ茂窃ニ奉窺

上候得共、聊被為懸

御念慮候御儀無御座、幕府一層之奮発を添、重疊難有

仕合奉存候事ニ御座候、尚此上とも不堪之儀は、幾重

ニも御警策被成下置候様奉伏願候、右は別而御垂諭之

御請迄、猪太郎へ托し奉捧一書候、他は同人之口上に

譲り、併而奉期不遠上

京拜候之時候、恐惶謹言、頓首百拜、

十二月朔日

慶永

蓮宮法親王

侍執

右十二月十日高崎猪太郎持参、関東より

勅書謹拝見仕候

勅諭之趣奉畏候、策略等之義は

御委任被成下候条、尽衆談

上京之上、委細可奉申上候、誠惶謹言、

文久壬戌年十二月五日 臣家茂

花押

為

今度被 仰出候攘夷之

勲慮、天下江布告仕候ニ付而は、

御親兵之義、御沙汰之趣奉拝承候、就而は、家茂征

夷之重任ニ膺り、且右近衛大将をも兼任仕候上は、

御守衛之義は職掌ニ候間、乍不肖堅固ニ 御守衛等之

手配可仕、尚不足ニ茂被為思召候は、諸藩より召登も

可仕候得共、一体外夷を攘候は

皇国全地之警衛肝要ニ付、列藩之義は国力を為養、九

州は誰々、奥羽は誰々と申如く、藩鎮之任お専に為仕

候はは可然哉と奉存候、仰願くは此旨被為 聞召候様

仕度奉存候、猶明春早々上京之上、警衛之方略具ニ奉

聞を可奉経候、恐惶謹言、

右戌十二月十三日土藩平井収二郎持参

私家来当春出京仕居候者共之儀ニ付、蒙

御抄度奉恐入、早速答筋差免、上京仕候様申付置候

処、別紙名面之通、昨十三日着仕候、右ニ付、私召連

御礼奉申上度、此段奉伺候、以上、

十二月十四日

中川修理太夫

小河弥右衛門

田近陽一郎

野溝甚四郎

堀謙之助

夏目惇平

赤座弥太郎

樋口勝之助

安野藤次郎

森玉彦

渡辺彦右衛門

田部龍作

福原武三郎

広瀬健吉

矢野勘三郎

高崎善右衛門

宇野閑造

右戌十二月十四日岡藩小原隼太持参

一私共国元立退上京仕候付、国元より伏見宮様江申出

候所御座候由承知仕候、右は如何様ニ申出候哉、趣意

承知不仕候得共、定而不所存之次第申立候事と奉存候、

就而は別紙之通、被

仰遣戴候様仕度、私共内存奉願上候、

十二月

伊達五郎

横井次太夫

此度伊達五郎・横井次太夫上京致し趣意は、誠義之言
路壅塞致し候付、不得止事上京致し、全国家江忠誠之
義專一ニ申出候趣意、尤ニ 思召候事候条、於国元も
格別ニ相心得、政事行届、誠義之者引起、土風奮発致
し候様、 思召候との趣、可然 御沙汰被為成下候様
仕度奉存候、

十二月

右戌十二月十三日関白殿より相廻ル

外夷摂海江軍艦乗廻之儀、頭然たる勢ひニ御座候ニ付、
草莽愚頑之小論、恐も不顧奉言上候、

一上陸差留候而も聞容不申、押而上陸ニ及候ハ、

神州之凌辱ニ相成

皇威ヲ可奉穢儀ニ付、打捨可申義当然也、是則無名之

軍ニあらず、 天義之兵也、

一摂海へ来岸之上、醜虜大砲ヲ放チ襲ひ可申義必然也、

且石山之城へ不意ニ乘入り候姦術ヲなし可申、其期ニ

至混乱ニ及ひ不申様、 御手配急速ニ被為遊 御指揮
度事、

一内裏守護、浪華出張先後之備へ、遊軍等之御手配之事

一土手ヲ築キ、台場御手当、大砲備へ之事、

一大坂市中之輩、乱雜ニ及ひ不申様 御指揮之事、

右ヶ条被遊 御猶予候而ハ大害相生し可申、御一大事

之 御場合ニ御座候、軍書ニも兵者奇道也、軍令ハ権

変之道也、区々たる法格ニ被拘候而ハ、忽チ大機ヲ失

ひ不朽之汚名を取候義必然也、断して行へハ、威風凜

然として人を制ス、是從古和漢共、英雄名士ノ主要に

して致したるようす真ニ千歳之一時、世之変転且夕ニ

有之、速ニ西国之諸侯ヲ被為召、断然 御敵令被 仰

出度事、

十二月十二日

久留米藩

園田三津二

一諸侯ヲ収結ス

小御所ニ会シ

天顏拜、上ハ 神州武徳光耀之為、下ハ蒼生安穩之為、

可抽忠誠旨

德音ヲ下シ、且杯ヲ賜ふ等之事、

一英雄延攬ス

後三条

後醍醐帝之制ニ法リ、文武之大館ヲ被開是ハ諸侯江被仰付可然候、貴賤

ニ不拘、非常之忠誠英略弓馬一能之者ヲ召シ、千載之

偉業論弁治定セシム、然上ハ天下英雄名士群參、是よ

りして守衛之天兵ヲ四方ニ開キ、正義ヲ盛ニし邪枉姦

徒ヲ屈服ス

神州之国体嚴正ニ成リ、回天復古之大業斯ニ基シ可申、

此館大総督

栗田口二品親王

(副)
偏総裁

〔轉法輪

中山卿 三条卿

姉小路ノ三卿

右天下人望之所歸也、

一海岸防禦之事、

友ヶ島瀬戸、是ハ紀州領ニ而、加田港と申所有之、一

説ニハ加田ノ瀬戸とも申候由、淡路島ニ境ウ、

一阿波(備前)鳴戸瀬戸、淡路島と阿波之國に境ふ、

一佐賀ノ関ノ瀬戸、豊後領と伊予領ニ境ふ、

真中ニ島有、サシマ、ハエシマ、五ツニ別ル

一豊前早とも之瀬戸、此瀬戸之儀は九州往復渡海肝要之

場所ニ候故欤、去酉四月下旬、外夷等大軍艦一艘、蒸

氣船三艘、同領大里と申所より凡一里余先ニ茂志ト申

所有之、同所沖ニ廿日余滞船海上測量、剩へ上陸、彼

辺山上江押登、丁見等仕候義ハ深意有事と相見へ、彼

等か姦術実ニ忌ミ憎むへき事共ニ御座候、

右之外、岸和田・堺・尼ヶ崎・兵庫辺江猶更備禦且某

地之高低ニより、或ハ山ヲ開キ土手ヲ築キ、次第二合

図之道火ヲ仕掛、大砲ヲ備へ、石組は大砲ヲ防クニ不

利由、

右五ヶ所ニ防禦不相備候而は、大坂より小倉迄之内海江夷賊軍艦ヲ乗入、上方・九州兵器運送離間之姦策ヲなし候は必然也、且京北ニ当り越前・若狭ハ海辺ニ而、京師より道法纜ニ十六里位之由、此所右ニ准シ敵重備禦之事、

右海岸防禦之儀ハ、寡君より早々建白可仕旨申達置候、

右三ヶ条、今日之御急務可為候、

薩藩

大島三右衛門

村田新八

右之兩人、伏見一挙以前国元江被差下遠島之由、兩人共無双之忠烈、中ニも大島三右衛門義は、頗ル英略実忠之人傑ニ御座候由、天下ニ知られたる者ニ御座候ハ、速ニ島解ニ相成、上京不仕候而ハ、西国筋有志之者共、義勢ヲ挫キ天下之御為不宜候事、

十一月廿六日

久留米藩

園田三津二

私儀上京仕候処、暫滞在御警衛仕候様被仰付、難有仕合奉存候、右御礼時候御見舞旁伺上仕候、此段諸大夫迄申達候、

長岡良之助

右戌十二月十五日持参

私家来当春出京仕居候者共、咎筋差免為御礼上京仕候様申付置候処、去ル十三日着仕候、右ニ付重立候者、別紙之通召列為御礼参上仕候、

十二月十六日

中川修理太夫

此段坊官中迄

小河弥右衛門

田近陽一郎

堀謙之助

一藤堂和泉守齋宮御再興之事及建白、御衆議之上可有周

旋蒙 仰候由承候、元来和泉守心底、從來之所業克々御賢探有之候哉、即今之形勢、挙国攘夷之機枢ニ而、上下混雜之折柄、神宮 御警衛被 仰付候者、御至当之御事、

皇姊ヲ被遣遠境候御事、甚不可然、後年災ヲ釀候事必定と存候、全は被為対 神宮御敬神之 叡慮ニ而、被許候欵ト存候得は、御敬神御実策ニ候者、万事御變革之御時節、先於 神宮称神敵候吉田家所領之地ヨリ例幣發遣ヲハ被為止候方、何許可協神慮哉、此頃有志輩、若干神祇官御再興頻申立候得共、此者関東御往復無之而は、即今御再興ニ而難相成、先神嘉殿南庭ニ新嘗祭ニ被用、東西舎之仮屋ヲ取建、幔仕切ニ而構、官代被遣候ハ、神宮御満足ニも可被為在、且参向之輩兩儀山路之患無之可畏入候、一旦被 仰出候齋宮ヲ被為留候と申儀ニ而は無之事、不急様御塩梅願度候、和泉守存慮能々御檢察有之度は、唯今攘夷大概一定之時勢、何方ニ茂武備充実可為專一之處、數百年退転候齋宮御

再興申立候は、外見物々數聞候得共、所謂強兵之國ニは不相当候、尤防禦警衛之儀は、事実不容易、何程此迄己國強兵充備タリトモ、到此時候而は、從彼十倍之大藩武備充実之聞有之國サヘ不安心、一途強兵之略ニ致苦心、尚勵武勇而遊惰ヲ誠候、如此即今之時勢之処、齋宮之事申立候は、擬于神忠不放遊惰之弊欵、或強外藩之強氣ヲ不知、所詮慢心招禍之恐不少候、且又齋宮御再興周旋ト、警衛防禦ト兩端ニ拘候ハ、兩端之内勝劣出来候、元来和泉守諂諛之災、飾神忠專齋宮之事条ニ周旋仕候ニ相違無之、左候ハ、自国中人心相傾強兵之謀相緩、遂後日災ヲ釀候事、十日所視候条、克々不被為廻御遠略候而は、遂幸愆宸襟候基源と奉存候、事体相變候得共和宮関東江被為成後之形勢、恐多候得共思比不堪苦心候、

一諸藩登京候者、速参 内賜天盃候事、定而夫々可然建議有之、專人心氣合之御良策ニ可被為在候得共、以五

箇条愚意申述候、

一 兩藩以周旋之功、被聽參 内賜天盃候事と存候処、

到此比諸藩追々参 内、初発来周旋之藩無其詮相聞、

密不懷腐心哉、

二 諸藩以奇巧登京、致矯飾漫吐暴論候得は、速聽參

内候廉ニ不相当哉、

三 漫拜 天顏、後日其國風俗忠士致檢察、有游惰之弊

は、哀天戴之輕而可拆英氣哉、依藩ハ不正儀之族も

相聞候、

四 巷說雖不足論、人心気合之御良策ニハ可有之候得共、

不論邪正真偽、被聽 天拜候も專諸吏之不穿鑿と申

說紛々、此說遂傷人望候基源歎入候、

五 諸藩論判婦一候哉、利口之覆邦家之恐茂有之、諸藩

一致之遵奉ニ不相成候而は、遂成敗忽釀大患候、何

卒宜御賢考偏願度候、

一 中川修理太夫一件、乍恐荒涼承得候、遂以改心之趣、

落居之様ニ候得共、実ニ於改心者、中川土佐・小河弥

右衛門・広瀬友之丞等登京無之而は如何敷候、全体は

右三人喚寄せ、登京之上改心之趣申立、御宥恕ニ相成

候ハ、悔前非候旨趣不相立、衆人更帰服不仕候欤、

喚登候と申候ニ而は、決而内心改心トハ存不申候、此

辺御明察無之候而は、大患之基源ト存候、

一 神祇官御再興は、 皇國之御柱、以神祇官諸官之上ニ

被置候程之儀ニ候間、有志之輩頻周旋候、承得候ハ、

追々及言上候間、何卒御再興之儀ニ相成候様願上候、

齋宮御再興候は、尚更之御事、 神祇官ヲ廢候候ニ被

關、齋宮御再興ニ而は、事体前後ニ相成候と、乍恐奉

存候、譬は無礎而立柱之類欤、

公愛戊午以来不願恐怖吐漫言、可蒙

勅勘存居候処、却不存寄被召加近臣、甚恐縮仕候、

爾來益微忠之思衝干胸候得共、不得寸隙旁送時日候、

日夜巷説区々満耳、不堪歎息、併願三省之誠候得共、

徒打過候も不本意、不願万死癡案書綴候、何卒群吏

加明察能通下情而禦衆侮は、奉赫朝威而攘夷可無疑

奉存候事、

右壬戌十二月十六日持參

公愛上

一今度国事御用掛被 仰付、愚蒙之公愛殊近臣之先輩高才之人不少、為新加身蒙 仰甚恐縮仕候、併押而御請可申上蒙御風論、乍恐縮御請申上候ニ付、以来国事向は勿論、御規則辺之儀ニ付而は、見聞自然不得意之筋有之候は、実以涉万緒人心気合ニ拘候儀ニ候間、譬於其事掛中不得意之方有之候とも、因循姑息不仕、猥令言上度候、依事御嫌疑之筋可有之哉、且逼忠憤言上候事故、考違も可有之哉、此段御理申上候、御時節柄、何卒精誠因循姑息ヲ不放候而は、逆も報国難致候、尤此辺は以密書可申上候、

一過日蒙 仰候内、諸藩之輩江以私情相狎、不可致往復之儀、奉背 勅意候而は無之、会日高才之面々評論之儀ニ候得共、乍恐不通下情者、井蛙之論ニ相成可申、左候ハ、兎角因循姑息之臭氣弥難去、万民一致仰

御威光候処ニ不到、尤論判之儀不可漏脱扱は專要之儀ニ候得共、恥下問候而は、不正儀ニ相成ヤスク候間、諸藩有志之面々致往復、広問于衆通下情候様專仕度、併評論ヲ漏シ候と申ニ而は無之、急度可有取捨事ニ候、此段克々御賢考願上候、仮令依事評論相漏候共、衆人帰服候ハ、此則即今御良策ニ無之哉、於公愛は御良策之場ヲ肝要と奉存候、此一条之内相狎ト申字、巻懐之論可有之と恐察仕候、

一評論相漏候ハ、朝威軽々敷相聞候と申論有之、此ハ因循之弊ニ候、先条へ所述候、夫より俗ニ偏言汗ノ如ト申候得は、被 仰出候而不帰申儀、近比何ヲ以被仰ニも、 叡慮々々ト有之候、甚 叡慮軽々敷恐入候、此後は衆評或朝議如此ト被 仰欵、仍猥 叡慮ト有之候義可為御無用候、総而被 仰出儀は、実以大切成事故、可相成丈心ヲ不用レハ、実ニ 叡慮難有候間、衆評朝議ト被 仰出置候ハ、自然不気合之節、更評論モ易致候欵、

一過日九門外江押紙仕候由、其文体克々御賢考可有之事
と奉存候、余程尽心力認候と存候得は、等閑ニ御聞捨
ニ而は、当時諸民王化帰順之折柄ニ候間、実々有志輩
拆英気候、尤有志輩克々探真儀置候事と存候得は、御
懸念有之御内郭御堅固專要と存候、

一諸藩攘夷之論不一候而は、呉々御為不宜候間、自然何
藩登候共、此迄登京罷在候諸藩と共に、学習院江一統
会合被 仰付、諸藩論判一決之上、御取上ニ不相成候
而は、自己之説区々、遂生患難候欤と存候、

一青蓮院宮国事御扶翼之儀は、兼々密周旋仕居候者は、
粗御様子も承居候得共、今度於掛中も不相知輩有之、
況諸臣一同不相心得候間、自然生疑惑候も如何、何卒
顯然ト一同江被 仰出置候様願存候、

右之条々迎茂掛中へ論候共、不一決と存候間、内々
言上仕候、就中諸藩往復之論、御規則難有儀申立度
論は、若御差支ニも相成候ハ、矢張流弊ニ而変革
之御趣意ニ反シ候間、迎も致苦心候詮無之と存候、

尤諸藩往復之論は、広被有候ハ、亦々有志輩所憎
之賄賂之災ヲ招候ト存候、當時有志之心中、随伝聞
感激而已之事候、尚万端冀明断候事、

公愛

右之条々御密論願度候

右壬戌十二月十六日持参

一今度攘夷之

勅諭於関東弥遵奉、且又策略等諸藩江布告建議之上、

可有言上旨、

勅答之趣粗相聞、不日 勅使上京言上之事と 叡念御

徹底 御満足ニ候、兼々 御沙汰之通、只々 神州之

御瑕瑾、深以被惱

宸襟候御儀ニ候、尤此上於幕府は、益無怠慢奉行ニ被

思召候得共、尚諸藩之面々ニも、右之 思召格別ニ拝

承有之、不泥累年之弊風、早武備等心得有之、因循遅

滞無之、速攘夷拒絶之談判ニ可相成様、出府厚周旋之

儀、頼被 思召候由、 御沙汰之事、

一被

仰出候演説、別紙之通ニ候、於鍋島前中将は、兼而英

名達 叡聞御感之御事ニ候、且老練之儀ニも候間、別

紙

御沙汰之趣奉存

神州御都合能尽力周旋之様宜申述、

別段

仰被為在候事、

右戌十二月廿日志々目献吉持参

小河弥右衛門

堀 謙之助

夏目 惇平

外用赤座弥太郎

樋口勝之助

渡辺彦左衛門

右老通在京人数

瓦林 重藏

田近周之助

吉田 肇

中川衛太郎

右老通在京人数

小河弥右衛門

田近陽一郎

野溝甚四郎

堀 謙之助

夏目 惇平

赤座弥右衛門
(弥太郎)

樋口勝之助

安野藤次郎

渡辺彦左衛門

森 玉彦

田部 龍作

福原武三郎

広瀬友之允

矢野勘三郎

高崎善右衛門

高野 関造

右老通惣人数

右老通扇国人数

右之通 御聞濟ニ相成候ハ、

御所存不被為 在候旨、鼎勇記を以議奏衆江御相談被

仰入候事、

今度以

勅使攘夷一定、速諸大名江可有布告被

仰遣候処、於 柳營拜請、弥

叡慮遵奉、策略追々尽衆議可有言上趣、

勅使帰京言上候事、

右戊十二月廿六日長谷三位殿より御達、

大膳太夫父子、此度御用向復命相濟候付、一先帰国仕度、
攘夷之策略考定仕候付而は、家政向段々処置仕度儀茂有
之候処、爰元滞在、殊ニ父子隔居候而は、旁前段之処置
行届兼候儀も有之候付、父子共一先帰国被 仰付被下候
様奉願候、急速

御用之節は申合せ、何時茂上京可仕候間、当節大膳太夫
重復中ニ付、私共を以御願申上候事、

文久三癸亥年正月 長州前田孫右衛門持參

正月十日長谷三位殿より被申上、左之通

尾張大納言

来十五日巳之刻參 内被

仰出候、此旨申上候也、

正月十日

信篤

松平大膳太夫

同 長門守

帰国御暇願之事、尤之儀被

聞食候、但方今時勢、今暫滞在輔佐有之度被 思食候得
共、於大膳太夫は長々滞之儀故、一先帰国有之、自国
取調等茂可有之、於長門守は乍苦勞在京尽力可有之被
仰下候事、

正月

八幡山崎辺御台場御用周旋被

仰付候ニ付、去十二月九日奉伺置候通ニ御座候処、追々

日数茂相重リ、此上空敷押移候儀は、何とも不本意至極

奉存候、此段 御憐察被成下、可然 御下知被成下候ハ

、取急御用度相勤候様仕度奉存候、右は重キ御事柄、

深御朝議被為 在候御儀欵と奉恐察、重而奉伺候段は、

何分ニも奉恐縮候得とも、万々一急速 御下知難被成下

御訳柄ニも被為 在候ハ、別段相応之 御用向ニ而も

被 仰付被下候ハ、難有仕合奉存候、此段奉歎願候、

以上、

正月十二日

中川修理^(久昭)大夫

沙汰被為在候事、

大村丹後守^(純忠)

就蛮夷之儀深被惱 宸襟候処、報国尽忠之志願有之由、

達

叡聞、御感之御事ニ候、尚御為

皇国抽丹誠、自国海岸并長崎市中等防禦敵整可有之、且

自国無事浪華海非常之節は、早々上京 御警衛可致被

仰出候事、

正月

正月廿一日議奏加勢より廻ル

松平長門守御暇帰国之儀、先日被相願候処、滞京尽力可

有之旨被 仰出候処、猶又帰国再願之趣被 聞食候、父

子談合国政処置可仕旨、尤之儀ニ被

思食候得共、当今形勢被惱

宸襟候間、先日被 仰出候通、滞在周旋可有之候様、被

思食候ニ付、帰国之儀暫見合候様、別而此旨可申達 御

細川越中守^(慶順)

来廿七日参内被 仰出候、此旨申上候也、

正月廿二日

資宗

青之

坊官中

正月廿三日阿野より相廻ル

昨日以一紙国事御用之儀、従三公御理申上置候ニ付、何分重大不容易義ニ付、存念ニ有之候間、何卒御用掛之義御理申上度存候事、

正月廿二日

忠房

実良

松平春嶽

去廿三日品川沖ニ而軍艦拝借出帆候由、付武士届候、仍申上候也、

正月廿六日

忠礼

青蓮院宮

坊官中

右正月廿七日徳太寺殿より参候、

正月廿七日

実則

右同日飛鳥井殿より参候、

亀井隠岐守口上書

口上書取

旧冬度々御内

勅頂戴仕難有奉存候、就而は小藩不行届之儀ニは御座候得共、為御警衛滞在仕居候儀ニ御座候、尤当節在府御割合ニ相成候ニ付而は、頃日 御暇をも被下置、一応出府被 仰付候上は相成丈早速帰京仕、乍不及尽力仕度奉存候儀ニ御座候、此段宜御取計被成下候ハ、重々難有可奉存候、併右等存念之候申上儀は甚恐入候得共、尊案茂可被為在哉と御伺奉申上候、敬白、

正月

右正月廿八日

冊子原寸 縦二八・五糎 横二〇・五糎 五〇枚

今日依御差支被止参 内候、仍而申入候也、

細川越中守

三六九ノ一 久光公上京御沙汰書

本田弥右衛門ヨリニ之丸御側役衆へ 二通
勅諭書通達ノ件

三六九ノ一

(包紙ウツ書)
一 勅諭書

三通

(朱)
「十一月十六日京ヲ發ス」

戊十一月廿六日達ス

包紙原寸 縦三八糎 横五二糎

(包紙ウツ書)
一 勅書

一通

別紙兩通之趣被仰出、関東江茂申達候間、島津三郎早々
可有上京様、薩州江被

仰出候事、

十一月十二日

文書原寸 縦一七・五糎 横三六・五糎

包紙原寸 縦二八・五糎 横四〇糎

三六九ノ二

(包紙ウツ書)
一 関東江被 仰出候、
勅書 二通

(端裏朱書)

「戊十一月十二日 京より

本田」

「端裏付箋」
「壬戌年」

一 勅諭書

一通

一 勅諭書
関東江被相達候、

二通

右今日從

関白殿下、御手自御渡相成候付、高崎左太郎外ニ兩人

江為致奉護差下候間、被差上候儀共宜御取計可被成候、

以上、

戊十一月十二日 京都 本田弥右衛門

二之丸 御側役衆

追而御側役衆江別段不及御問合候間、是以宜御頼申越候、

寺尾 元長
并河左衛門尉

文書原寸 縦一六・二種 包紙原寸 縦二七種
横五一・五種 横二〇種

文書原寸(折紙) 縦三三・五種 横三三・五種

三〇 青蓮院宮御容体書

(包紙ウツ書)
「御容体書」

青蓮院宮様、八月下旬時程御感冒、其後数度ニ被為及、其節々御当剂調進ニ付、御願快ニ被為向候由ニ候得共、兎角其後御寒熱御往来、毎夜御盜汗御両脇下御苦満、御咳嗽被為在候、右御容体之義ハ、御勞疫御感冒之御前候にも可相成御残熱と奉拜診候ニ付、聖滴方・柴胡・鼈甲湯加・麦門冬調進、且前年来御瘰癧御蓄毒御悩之御義も有之、其御徴候とも被奉伺候義有之ニ付、犀角別煎汁調進罷在候、右之御容体拝診之次第言上仕候、以上、

十一月十二日

三一 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ

京都守護職トシテ上京ノ件

(包紙ウツ書②)
「十一月十三日」

戊十一月廿六日達ス

(朱)
「写終ル」

(包紙ウツ書①)
「島津三郎殿 忠熙 几下」

(朱)
「壬戌」

(朱) 緘

(封紙ウツ書)
「三郎殿 忠熙 几下」

緘

修理太夫殿へ宜御伝言可給候、貞姫方へもよろし

く御申可被下候也、

追々寒氣増長候、弥以御擲御勇猛之御事珍重不斜候、

扱は此度京師守護職之儀ニ付、早々御上京之事、

御沙汰ニ付、御伝申入候、高崎(正風)佐太郎差下ニ相成候、何

も御聞取可給候、先々

勅使下向存外閑東之模様も「□」安心く之事ニ候、実ニ御周旋之儀ニ而、一・越出頭有之事、越之処分極ニ相成

実ニ「□」御上京之儀、急々之儀実ニ何共く御氣之

毒く御迷惑之事、御察申入候得共、勅使上京、引続

一橋・会津等上京ニ相成候も難計、何卒く少シも早方

ニ御上京、来月下旬迄ニ御上京ニ相成候様、偏ニ御頼申

入候、色々申入候儀も在之候得共、差急キ荒々申残候也、

十一月十三日申刻

寒氣可被用心ト存候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第一七五号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦

一五種

包紙原寸

①縦二八種

②縦三〇・五種

横一〇三・五種

横四〇種

横四二・三種

三三 志々目献吉ヨリ高崎左太郎へ

粟田宮御病状

粟田宮様御容体、寺尾元長江尋問致し候処、初発は類瘧

状之 御証ニ而、種々 御療養被為在候由、御医師は山

本大和守殿、高階安芸守殿等より御療治被差上候由、御

薬之次第は眩と不存候由、元長ニも初は極御内分ニ而、

御診被 仰付候由、前医被差上候御薬へ、柴胡・姜桂類

又小柴胡・加葛根等之由、当分ハ人參養榮湯類、種々之

加味と相見得候由承り申候、元長拝診之処ニ而ハ、唯今

之処、日を経漸々肺痿虚勞等之御証ニ変し候半と、大ニ

心配之由、尤此以前来初冬より、御足ニ御瘰癧之類御発

し之処、去年之冬、一医ハツボウ一差上申候処、御平愈

之由 御沙汰被為在候由御座候得共、末た其御氣味有之

御皮膚もザラく鮫

御肌之様有之、内攻と申丈ハ無之由ニ御座候得共、何分

御発シ被遊候方可然奉拝診候ニ付、犀角独煎差上度旨申

上候処、至極之思召被為叶候由、只今之御容体は、御脈

状細数と申、尤とは無之候得共、御熱氣も被為 在、御

盗汗御欬嗽も時々有之、御臍下より右脇江御瘵塊も被為

在候付、柴胡・鼈甲・湯加・杏仁輩之御主方差上度旨も

申上候処、是以至極 思召ニ被為叶候由御座候得共、未

た差上不申候段承り申候、元長之申処、私ニも至極同意

之由申置候、尤今日迄、元長三度

拝診仕候段承り申候、其外御不如意之処、歎ケ敷ケ条多

ク御座候得共、貴殿様御存慮故不申上候、右は元長より

承及候

御容体、如斯御座候、以上、

戌十一月十三日

志々目献吉

高崎左太郎様

文書原寸 縦一九・五糎 横一四〇糎

三三 近衛閑白ヨリ久光公ノ上京ヲ促ス

〔端裏付箋〕
〔御沙汰書〕

〔端裏朱書〕
「壬戌十一月十三日」

閑白殿下より

此節は不容易被為蒙

天命 結構之御事ニ候、就而は精々早目御仕舞被成、可

成来月下旬迄ニは御上京有之度、一筆以書状茂申上越候

得共、猶又其方より御勅メ可申上、

勅使会津杯上京前ならへ、別而御都合茂可宜と可申上旨

再三承知仕候事、

外ニ私を以御伺申上置候事有之候、

十一月十三日

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一七四号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六糎 横四七・三糎

三三 桂右衛門ヨリ小松帯刀へ

江戸屋敷引上ノ件

尚々寒氣ニ向、随時折角御自愛專要奉存候、諏訪

氏より一札ニ預候得共、宜敷様御蔭ながら奉願候、

此度取扱一条ニ付而ハ、い細申上度御座候得共、

御聞及も多分ハ御座候半と奉存候間、此段態と致
省略候、乱筆御高免可被下候、

御細翰恭致拜見候、寒氣相催候得共、弥御揃御壮栄被成
御精務奉悦賀候、於爰許

御両殿様其外様御揃御機嫌能御同慶奉存候、小子ニも無
異条寵有候間、御放念可被下候、扱此節開聞丸出帆ニ付
市来被差下、い細御鳳声之趣致承知候、其御許之形態も
段々相変、何とも心外之次第御座候得共、何分ニも当分
ニ而ハ見留付兼候様子、此末如何相変可申哉、先面白時
機ニも相向可申越と之事故、貫徹いたし兼、追々被仰改
候半と奉存候、爰許従前相変儀も無御座候得共、何分ニ
も此節御案内通御取扱一条ニ付而ハ、不行届之処より甚
不都合之次第ニ候哉、私ニも逼塞等被仰付、夫故何事も
暫時ハ関係不致候処より適々飛脚立等之節も時々御主音
等も不申上時宜ニ御座候、然処以前江戸御屋敷引取一条
ニ付而ハ引入中 御沙汰之趣も為有之由ニ而、表通御間

合被成候通ニ而、余り断然と引取候儀、ちと 思召ニも

相逆ハ候訳奉伺、未私ニも引入後ハ拜顔も不仕候付、しハ
し思召も不伺候得共、先当分ニ而ハ江戸表之儀、 天璋

院様江御対し、御義理合丈ハ不相立候而ハ難相済との
思召ニ御座候由ニ付、御評議も有之筈候得共、右之趣能

々御合取被下度御座候、尚い細申上度御座候得共、取込
ニまかせ不能細事、尚追々申上残候、先ハ貴札之御礼答
且時季御尋迄荒々如斯御座候、恐々敬白、

十一月十四日 桂 右衛門

小松帯刀様

文書原寸 縦一九糎 横一二・六・五糎

三三 京都本田弥右衛門ヨリ小松帯刀へ

久光公京都守護職任命ノ件

(包紙ウツ書)

一御中途 京都

帯刀様 本田弥右衛門

極御内用御直

ノ

┌

昨十三日

勅諭書一通

関白殿下より被遊

御渡候、高崎(正風)左太郎外ニ兩人江為致奉護、御国元江被差

下候、右は

三郎様京都守護職被 仰出候由ニ而、別ニ関東江被

仰達候写も同断被 相渡候、御上京之上、い細御直ニ可

申上候得共、此段極御内用を以申上候、以上、

十一月十四日

京都

本田弥右衛門

帯刀様

文書原寸 縦 一六糎

包紙原寸 縦二八・五糎

横四〇・七糎

横四〇・七糎

三矣 村山齋助ヨリ大久保一蔵へ

中川修理大夫問題

(端裏朱書)
「壬戌十一月廿日 村山齋助京より」

中川修理大夫一条は、先達而井上弥八郎便より粗

申上置候得共、猶又書認左ニ申上候、

中川修理大夫家来小河弥右衛門一列致帰国候処、早速よ

り咎目被申付、いづれも致禁固幽閉候由、此事

青蓮院宮様達 御聴、甚敷御憤怒被遊

御沙汰之次第ハ、右小河一列之者共ハ、外之浪士共と違

ひ、偏ニ勤 王之志ヲ相立、始終薩藩之指揮ニ随ひ、聊

も暴挙らしき儀も無之候故、帰国之時分も格別之訳を以

御褒詞等被 仰付、就而ハ藩主迄も 御賞譽被下候次第

右ハ全列藩之士氣を鼓舞被遊候為ニも相成事故、厚く可

奉汲受之処、右様之取計ひ、畢竟

朝廷を致軽蔑候仕方、甚以奇怪之至、殊更世評ニ而ハ、

中川儀ハ関東より急召ニ而十ヶ年御譜代社奉行被仰付

との風聞も有之、ケ様之俗物関東役人ニ相成候ハ以之外

不宜、いづれ共三藩申談、兵庫明石辺迄出迎ひ、国元江

追返し候様との

御沙汰ニ御座候、右ニ付当邸よりハ、私井ニ鶴木孫兵衛、
長藩よりハ桂小五郎、佐々木男也、土藩より手島八助・

乾作七以上六人、十月廿九日下坂、当夜早速中之島中川邸へ致推参、面談之儀申入候処、色々断ニ及候得共、押而申入候処、無扱被致面会候故、右

御沙汰之次第一々致演説、其後番頭熊田陽介・用人草刈敬輔・小原隼太・留守居熊田万八、右之面々別段ニ出会いたし候故、猶又論談及数剋、天明旅宿へ引取申候、藩主始メ重臣等ニも甚敷恐怖之体ニ而、偏ニ致悔悟、翌日兩人出京御詫申上、小河列幽閉早速ニ赦免申付候、飛脚差立候由ニ御座候、左候而藩主ハ其俣滞坂、右之御わび言相済迄之間、伏水へ滞在仕候様、十一月八日ニ被仰渡、当夕着伏、右御ことわり相済、夫より上京、等持院江止宿仕候而、議奏方へ御礼ニ廻動いたし
陽明様 宮様方へも廻礼仕候、左候而改心之上ハ偏ニ於京地御用相勤申度との趣、別段ニ願出候由御座候得共、先度関東より御めしニも相成居候間、別ニ当地へ御用も無之事故、早々下向いたし候様被
仰出御模様ニ御座候、右ニ付御内々三藩江調も被 仰付

候得共、いづれも関東下行被 仰付可然と衆議相決、其一段申上置候、左候而小河一列も近々上京之由ニ承申候、右之段荒増以乱筆御心得迄奉申上候、已上、
十一月廿日 村山斎助

大久保一蔵様

玉下

文書原寸 縦一六糎 横一三七・五糎

三七 攘夷ニ付対州ノ防備ニ関スル長州へノ御

沙汰書

一二通

攘夷ニ付対州へノ勅諭 一通

合三通

三七七ノ一

松平大膳大夫様

御留守居助

山添金之助

右江去ル十五日差越面会之上、対州一条之儀、得と申述候処、当分御家老初御留守居共ニも上京中ニ而、委細之儀、御当地江ハ何度不相分候得共、猶亦得と取調返答可致との事御座候間、何分差急候訳ニ付、早目取調呉候様致

演説罷歸候、然処、去ル十九日別紙之通、返答相達候間、
来書相添差出申候、

宗 对馬守様
御留守居

山崎東助

右江同日差越、右東助江面会、今般攘夷被 仰出候付而

は、对州表之儀ニ付、厚

叡慮之御旨、松平大膳大夫様被成御承知候付、御同人様
より被仰遣候趣有之、右御挨拶之御使者、旧臘十一日御
差遣ニ相成候御一条

太守様

三郎様被成御承知候処、右者は迄 大膳大夫様より何等
之御打合等も無之儀ニ付、何様之御時掛合、且御同人様
御方より被仰遣候趣等相知居候へ、委細承知いたし可
申上段、御国許より申来候旨申演候処、右者於京都、去
戌十一月中也候哉、大膳大夫様御方江

勅諭之御旨被拜、直宗様御方よりへ、京都様御留守居助

樋口鎌之助と申者、村山材助江取会、委細之事柄打合、
長州様方江も引合、帯刀殿江も右同人より御届申上、其
上長州様より

勅答相成候哉之趣ニ御座候由申聞候間、左候へ、於京
都彼は御引合、且

勅諭等相成候御訳柄等巨細相分居候へ、写取差遣具候
へ、其趣を以御国元江申上度候付、乍御面倒近日中御
返被下候様いたし度段、彼は取繕致演説候処、委細承知
いたし候、其御御使者相勤候折、右等之儀申上候へ、
御面倒ニも不相成筈之処、最早 此御方様江へ疾ニ御承
知被給候御儀と奉存、御挨拶之御使迄相勤、今更恐入候
旨、右東助より承候間、程能返答いたし置候、然処、一昨
十八日、別紙 写取相廻申候間、来書是亦相添差上申候、
右ニ付而は、於京都村山材助江長州様・宗様御方よりも
彼は打合、帯刀殿ニも御承知為有之哉之趣ニ相聞得申候
間、御同人御下着之上へ、委細御訳柄等

御聴ニ相達候御儀と奉存候、乍併右材助江打合等相成候

書面等は相見得不申候間、万一相違之儀も御座候ハ、何分被仰聞度、左候ハ、其御趣ニ応し、猶亦承得候様可仕候、

右之通相動候間、御家老座江飛脚差立方之儀申上差上申候故、左様御承知可被下候、尤長州様ニ而ハ右之次第、且現事御使者として差越候東助申演候趣等承候処、内向不仕候而ハ不叶訳も御座候間、於御国元承知仕候通ニハ参兼、前件之次第ニ振替相動為申儀ニ御座候間、是亦御承知可被下候、此段形行申出候、以上、

御留守居付役

二月廿二日

内田仲之助

中山中左衛門殿

三七七ノ二

今度攘夷之

勅被

仰出候ニ就而は国家安危之係ル処、不容易事ニ候、就中

対州之儀は海路隔絶孤立之小島、自古賊衝之要路ニ而国政修整士氣振起不致候而は、別而御不安心ニ被

思召候間、其国政士氣之模様ニテ、攘夷之儀被 仰出度候、長州之儀は隣国之儀、且は親戚之統キモ有之趣ニ候間、宗家国政之得失士氣之振否、巨細取調、遂一被聞食度候事、

対州之儀取糺被申出候処、本邦第一之要地、守辺之専務因循之処置無之、頻急

勅諭遵奉ニ至候様有之度、且食ヲ異邦ニ求候次第、弥御不安心ニ候、猶此儀は、薩土両藩江茂申合、早々御安堵之道周旋有之度、被思食候事、

内田仲之助様

長州臣

山添金之助

尊翰拜見仕候、如仰兎角不同之氣候御座候処、忬々御安
康被成御座奉拝賀候、然は先達而ハ草庵江被為入、緩々
拝謁大慶至極奉存候、其節蒙仰候一条、其筋へ申聞候
処、当時其筋之者とも不殘京都江罷登、何分も爰許ニ而
ハ相分兼、京都表ニ而ハ其向役人共詰居仕候付、委細相
分可申と奉存候、節角之御問合御座候処、何も不都合之
次第御座候得とも、前段之仕合不悪御聞得等可被下候、
早速取調其答可申上候処、其筋取調兼甚延引相成候、此
段も不悪御海恕可被下候、先は貴答迄、早々如斯御座候、
頓首、

二月十九日

三七七ノ三

対州之儀ニ付長州家江之

御沙汰書写

今般攘夷之

勅詔被 仰出候処、対州之儀

皇国西辺之要害ニ付、乍恐於

朝廷格別御念被為入、国政之得失并士氣之振否

尊藩江御糺之上、攘夷之

勅詔可被成下置

御内定之御書達拜見仕、武門之面目自家之規模、重疊難

有次第奉存候中、深く奉恐入候仕合ニ御座候、国事多難

之次第は、追々奉入御聞置候迄之儀ニ御座候、然処、対

馬守様御事御病氣ニ付、御一己之御勤向不被為届、既ニ

御隠居御決定ニ相成、去ル朔日、御内密書被差出置候処、

去ル十二日、井上河内守様(正徳)より御先手御呼出ニ相成、表

向御願書被差出候ハ、御判元御見届として、対州江御

目付可被差下段御達ニ相成、今程定而御願書差出ニ相成

居可申哉、御病情不被得止、御隠居御願出之只中、善之

允様御家督御相統前

御内 勅被成下置候時、先遵奉之当主不定ニ相当、甚以

不易次第、奉恐入候仕合ニ御座候、誠ニ以宗家之存亡、

此時ニ可有之、大切至極之場合ニ御座候条、於尊藩深被為尽御懇評、何卒奉戴

朝命

皇国之御武威を不奉汚、社稷安堵之道ニ至候様御指揮、

伏而奉願上候、尤武備行届不申次第、国事之情実は別紙ニ相認奉入御覽候、

別紙写

対州之儀絶海之孤島夷国之渡口ニして

皇国之出丸前備共可申要地ニ付、往古より城壘烽候(燈)之設、

防人戍兵手厚ニ備被為置、糧米之儀茂年分肥筑豊前後(六州)

致運より脱之転、敵重之御守備相立居候次第、正史ニ相見得、其

後対馬守先祖、対州地頭職ニ補任せられ候以後も、肥筑豊

三前州之内数郡を領石高今ニして、藩屏之守備随分ニ相

整、文永年之間外夷拾余度之襲来手痛致防戦、終ニ一度

茂勝利を失御国威を汚候儀無御座、一州之守禦、先は致

全備居候事之由御座候得共、其後追々之国難、無余儀、

肥筑豊之旧領全手離、壓下之諸士郎等不殘、纔ニ一島之内ニ屏居致候様成行、夫よりして年来之粮難、中々以一朝一夕之故無御座、数百年來之間、事長之儀ニ而多端不奉頌

御聽候、右之勢ニ而、漸々今日押移候処、元来不毛同様之土地柄、一州之生穀一州三分之人口をも難得養、纔ニ肥筑之領所些少之収納米且海漁之浮利、朝鮮国貿易之利潤を以、米穀ニ換へ、乍無念食を夷邦ニ仰、多年之間不束之取凌ニ在之候処、時変ニ随、朝鮮貿易之道も断絶同様之姿ニ至、終ニ今日家中之扶助無育も手厚兼候程之難迫、役筋之者共種々心膽を碎候而も、眼前之急ニ被追、守辺之実備難相立、苦心此事ニ奉存候、偶以前より備を相立候茂多は有名無実之儀ニ而、方今万国之兵勢一變、船舶盛行之時運ニ至候而、難取用筋而已、申サハ備向無之も同様之姿ニ而、如何ニ茂寒心不安次第奉存候、既一昨年来、外夷数度之碇泊、国中之疲弊は素り、国体古今之情実を顯し、何地迄も御国威相立候様、御英断之御指

揮、追々幕府江建白ニ及候得共、今以何等之御沙汰無御座、然処當時宇内之形勢一變、攘夷御一決之

勅諭ニ至、左候得は、天下之人心今日より戦鬪之覚語ニ至候而、難計弥兵端を被開候ニ至候而は、第一其患害を請候は対州ニ相見、爰ニ至り六百年來之旧領君臣、世守之大義ニ厚キ身を以国ニ殉、

神州之御為、宗氏之存亡相厭可申様無御座、州中人種々尽候限は、何地迄も御国威を不汚之覚語勿論之儀御座候得は、乍恐公を以

皇国之御為相謀候ニ、一州之微力十分勝算無算束、決而有之間敷儀ながら、万々一対州之地、醜類蹄を容而之術と相成、鬪国之咽喉を扼し、朝上之糧食之^(韓土)抛り、内地を席卷スル之勢ニ至候へ、忽天下之御一大事と罷成、大切千万之御事ニ奉存候、右様枢要之地位罷在、武備手薄成は申ニ不及、平時ニ雖国本、穀貨出入之算計不相中、剩戦国ニ生食を夷邦ニ仰候は、乍恐

神州之御名節

御国威ニも相拘、於大儀難安は素り、今ニも夷變相生、

一旦海路相塞候日ニ至候節は、州中眼前飢餓之憂ニ迫候は必然之儀ニ而、一国之命脈実ニ朝露之危ニ等敷、千載遺憾此一儀ニ奉存候、是等全以前より勢之不得止ニ出候儀ニ御座候処、果而貿易之盛衰ニ依、州中平常之取凌茂不手届之國勢ニ及、畢竟從來国本不相立、因循苟且今日ニ至候段、不覚語至極、一国之主たる者、可恥之限ニ候得共、其恥辱を相包、此上恥辱ニ勝り候一天下之御大事を引出候而は、乍恐

天朝江奉対不忠之至、恐怖不少儀奉存候、就夫往時之過は如何様御譴責を奉蒙候而も、何分唯今之姿ニ而、一日片時も難打過、是非国体古今之情実貫徹致、

神州之大義御名節相立、普天之下

皇化之及所、寸地と雖、渠之輕蔑を受、益御威徳相顯、此場対州之地位を以、実備之算策を天下之公論ニ御打出被成下、公明正大之御廟謨ニ從、奉戴

朝威候而、一国之人心致奮興、海防之嚴備速ニ相立、天

下之先陣ニ相進候、心容を以、此上

神州之御威光を不奉汚様、御賢明之御指揮奉蒙度、伏而奉希上候、

右は今度攘夷之

勅諭ニ依、対州之情実御親藩之御訳を以、

尊藩江御取糺被仰出候付、不願恐、国体之大略口上書取奉添

御内聴候、素り微身之私共、何角と不容易儀を奉申上候段、千万不堪恐怖候得共、草野之微衷御明諒被成下、

書中不敬不遜之文言等、可然御海恕被仰付被下度、此場

皇国之御為奉蒙

御配慮度、幾重ニも奉願上候御事、

十一月廿二日長州家より被差上候御添書写

今度攘夷之

勅諭被 仰出候付、対州之儀、孤立之小島賊衝之要路ニ而、国政修整士氣振起不仕候而は、

御不安心ニ被思召候間、私儀隣国且親藩之間柄ニ付、前件巨細取調言上仕候様被 仰付奉畏候、就而は先達而以

来、対馬守家来上京仕居候付、

御沙汰之趣を以取調仕候処、別紙之通書取ニして申出候間、其假差出申候、国政之得失士氣之振否等御汲取被成下度奉願候、且又対馬守儀、兼々病弱ニ有之、御奉公難相勤、家督之儀、嫡子善之允江相讓、其身隱居仕度段願出罷在候由相聞、右様半途之場合ニ御座候付、攘夷之勅諭被成下候義ニ御座候ハ、隱居家督相整候、以上、勅諭被成下候ハ、一藩別而難有奉戴

朝命候儀と奉存候、

十一月廿二日

正月三日

勅諭并

御沙汰書写

今度攘夷之決議ニ至り、其藩之儀、絶海之孤島本邦守辺之要地、実備緊要ニ候、猶尽忠報国周旋有之度候事、

正月

就攘夷御一定は、

皇国御安危実不容易儀、全国一和一团、

叡慮於無違奉は難相成、一同合心戮力尽忠有之度、其藩

兼赤心報国之聞有之候間、殊

御沙汰候事、

正月

今度攘夷之

勅、天下江御布告被

仰出付而は、对州之国柄は賊衝之要地ニ付、州中必死其

職を尽し候儀ハ覚悟罷在候得共、元来兵食不足之身代、

殊ニ即今至極之難迫、平常之經營ニも行支、海防実備十分難手届、此中万一夷賊之蹂躪を受候而は、無此上

皇国之御大辱と深奉恐入候、既ニ於朝廷も自国之儀御不安堵被 思召上、長州家江隣国且親藩之詔を以、御沙汰之御旨も有之、且亦此程私儀不容易奉蒙

勅詔、然上は

皇国之御瑕瑾ニ不相成様

叡慮遵奉不仕候而難叶儀勿論御座候得共、前章難迫之国体、日夜不安寢食次第御明察被成下、此場对州之時位を以、実備之策略天下之公論ニ御打出被成下、御英断之御指揮偏以奉願候、情実巨細之儀は、猶家来共より可申上候、以上、

正月

宗 善之允
(義達)

正月廿五日板倉周防守様、同廿七日水野和泉守様江家老名元を以差出候書取之写、

対州之儀は絶海之孤島、賊衝之要地ニ付、往古より城壁烽候(墩)之設、防人戍兵手厚ニ備被為置、糧米之儀茂年分肥筑豊前後六州より致運転、嚴重之御守備相立居候次第、国史ニ相見、其後善之允先祖、対州地頭職ニ相成、以来も肥筑豊三前州之内廿万石余を領、藩屏之守備随分ニ相整、文永・応永年之間、外夷捨余度之襲来、手痛致防戦、終ニ一度も勝利を失、御国威を汚候儀無御座、一州之守禦、先は致全備居候趣御座候得共、夫より後追々之兵乱、肥筑豊之旧領全手離、麾下之諸士郎等不残、一島之内江屏居致候様成行、国難相極候中、嘉吉年之比、朝鮮国江好を結、通信互方之約を定、無余儀商利を以武備国用をも相達候事之由御座候、然ニ壬辰之乱通交及断絶、其後東照宮御深慮被為在、善之允先祖対馬守義智儀、格別之蒙

上意、彼邦との御好和、如御旨相整候砌、御隣交之御手長、藩屏押禦之御役相統被仰付候重大之御役儀小知ニ付難相勤、御役料代之訳を以、彼邦との貿易被差免、通交

旧ニ復、公私兩貿易之利潤年分三拾万金ニ相及、武備国用を茂仮成ニ相整罷在候処、時変ニ従、貿易筋近年相衰、私貿易及断絶、御役義難相勤、安永年懇願之訳ニ依、永統為御手当年々壹万式千金拜受被、仰付、将亦文化度朝鮮信使御新創之御用相勤候時分より、彼方との取引年分壹万余金余、永年之減損と相成廉、彼是、御酌量被成下、地方二万石御手当被下置、不容易両度之御特恩を以、貿易減損之償少數相立候得共、以前易盛之時節ニ相較候而は、国計莫大之違目、手元ニ取減知同様出入不当之身代柄ニ罷成候付、両度之御手当を以、勝手向取直し候儀、相届不申、國中累年困窮ニ及候次第、時勢とは乍申、元来不毛同様之瘠土、一州之生穀一州三分之人口をも難得養、纔ニ肥筑之領所些少之取納金、且海漁之浮利為主所、前章朝鮮国貿易之利潤を以、米穀ニ換、乍無念食を異邦ニ仰、尚不足之所は、年分買米を以、國中之食ニ手当来候処、即今貿易尚更相衰、全断絶同様ニ到、其上近年米価頻ニ沸騰、買米之用費以前ニ致倍々、弥国計不繼処より、

無余儀借金を以買米相整、全体之經濟向後弊を不顧、只眼前当局を相凌候を而已専務といたし、公金其外借財八拾万金ニ及、其内ニは領地之生毛を茂不得止金主江引渡候体之儀茂不少、旁米穀致欠之、家中之扶助過半は買米を以相濟候様之儀ニ有之、加之近年打続種々困難、費用不一形、從來之困迫今日ニ差添、家中之扶助撫育も手届兼候程之國勢ニ及、平時タニ右之姿ニ候得は、軍國守辺之儀ニ到候而は、尚亦実備難相整、偶以前より備と相立候も、多ハ無名無実之事ニ而、当今万国之兵勢一變、船舶盛行之時節ニ至候而は、難取用筋而已、申サハ備向無之も同様、如何ニも寒心不安次第奉存候、既ニ一昨年来、外夷數度之碇泊、国中之疲弊ハ勿論、国体古今之情実を

尽

後今以何等之御沙汰も無御座、然処、方今攘夷御決議之勅諭、天下江御布告被 仰出、尚於朝廷も對州之儀本邦第一之要地ニ付、隣国且御親藩之詔柄を以、長州家江御沙汰之趣茂有之、且此程善之允江不容易勅諭被成下、然ル上ハ片時も速ニ実備相立、御國威を不汚候様、

勅諭遵奉不仕候而不相叶段、奉申上候迄も無御座候処、元來兵食不足之身代、殊ニ難迫頂上之國体、実備之儀十分難手届、尤藩屏之御役柄と申、六百年來之旧領、世守必死上下一同其職を尽候儀は覚悟罷在候得共、一州之微力万一渠之蹂躪を請候而は、御國辱ハ勿論、無限天下之御大事と深奉恐入候、如右本邦第一之要地ニ罷在、武備不相整、殊更我國ニ生食を異邦ニ仰候は、乍恐御威光ニも相拘、於大義難安ハ申ニ不及、今ニも異變相生、一旦海路相塞候節は、州中眼前飢餓之憂ニ迫候は必然之儀ニ而、一州之命脈実ニ朝露之危ニ等敷、是等之次第ハ

敏トクニ奉願候而、御賢明之御指揮を可奉蒙儀ニ候処、

其遠凶無之、因循苟且年を過し候、今日切迫之御時節ニ差臨候而、俄ニ何角と奉願候段、不覚悟至極恐怖不少儀奉存候得共、今更不得止儀ニ付、往時之不覚ハ如何様共御謹責可被 仰付、何分只今之姿ニ而ハ一日片時も難太過、是非国体古今之情実致貫徹、古来異邦を頼、商利を以国を建候弊害今日ニ相極、州備難相整、

神州之御榮辱ニも可相拘時會

御明察被為在、此場対州之地位を以、実備之策略を天下之公論ニ御打出被成下、異邦商利之給を不待して兵食相備、何国迄も

御国威を不汚、

勅諭奉行仕候様、御明断之御指揮、伏而奉希候、以上、

正月

古川治右衛門

内田様

山崎
東介

一 翰呈上仕候、不同時候ニ御座候処、益御安泰被為涉奉敬賀候、陳ハ一昨日は遠路御光駕被下置、御懇話奉伺難有奉存候、被仰聞候書類吟味仕候処、大概写取有之候間、則廉之写取奉入御覽候、右ニ付御承知被成下、宜被仰上被成下候様奉願上候、右奉申上奉冀度御毫候、頓首、

二月十七日

猶以昨日早速差上可申之処、吟味且写取等ニ而、延引ニ相成申候間、今日ニ相成候段、宜御聞得等被成下候様奉願上候、再拜、

一 江戸御統金六万両ツ、年々御統相成候処、御吟味之訳被為在、今兩三年ハ矢張是迄之通、御統相成度との趣ニ候得とも、夫ニ而ハ 御趣意ニ不被為 叶、御姫様方御下向且諸向詰人数御減少有之筈ニ付、御賄料且苦勞銀等之為見当、年々金老万両ツ、御統可相成候間、臨時方御入用之義は、其節々別段御問合相成候様、且諸向何辺精々御取纏取調ニ相成、其段早々御問

合相成候様、委細之儀は式部殿より御問合相成候趣

一 当分江戸御囲米七千石程も有之由候間、当年之儀ハ別段御続ニ不相成、以来大坂より年々式千石ツ、代銀ニ而被差統、右を以奥州其外最安米於当表御買入相成候様吟味候ニ付、其通御取計有御座度、尤御仕登米之儀も老万石程御吟味有之、余所米於大坂御買入御仕登米ニ御振向之

御趣意ニ候旨、

右之ニケ条おのつから式部殿より、い細御問合可相成候得共、摂津殿儀御用部屋御兼帯之訳故、御方より右之段申断可申上旨、致承知候段申上候処、一々御承知被成候旨被仰聞候、依之形行此段申出候、已上、

亥二月廿一日
御留守居付役
内田仲之助

中山中左衛門殿

一 此節攘夷被

仰出候付而は、格外之御吟味有之、江戸詰人数御減少被仰下候付、御続米御払残五千石丈ケハ当分有之由候付、当秋より年々式千石丈ツ、代銀を以被差統、於当表外方より御買入相成候得は、難破舟之患も無之、且運賃米等之儀ニも不及候間、米穀潤沢之御大名様方、亦は外方聞合之上、少々ツ、ニ而も時々御買入相成候様有之候ハ、可然との

御趣意之趣、

一 江戸詰人数御減少ニ付而ハ、御賄料且苦勞銀等之御払方、年々老万両ツ、も御繰合ニ相成、其外臨時之御払金等有之候ハ、其節々御吟味有之、別段御問合相成候様

一 大井御屋鋪其外御不用御屋鋪ハ、此涯成丈直段無構御売払相成候様、乍併一統之儀ニ候得ハ、売入無之も難計候間、本百姓江御差返ニ而も被仰付可給候、亦ハ依時宜廢地ニ而も御吟味次第有之度との儀、右之廉々摂津殿江可申上被聞候段、委細御直ニ申上置候、尤式部

殿より別段御問合有之事之由、是亦申上候処、一々御

承知為被成との趣承知仕候付、左様御承達可被下候、

依而此段形行首尾申出候、已上、

二月廿一日 御留守居付役
内田仲之助

伊地知壯之丞殿

冊子原寸 縦二八・五種 横二二種 四〇枚

三六 朝廷大赦ニ付諸藩殉難者調査届出ノ幕命

其他ノ件

(端裏朱書)
「壬戌十一月」

大目付

御目付江

今度京都より厚以

御趣意大赦被仰出候儀も有之候付而は、銘々領分おゐて
国事之為非命之死を遂候もの有之候ハ、其段委細取調、
名前認出候様可被致候、

右之趣、領分知行有之候向々江可被達候、

右書付周防守渡之、

十一月廿五日

同廿七日 勅使 御対顔被為在候、

同廿八日

外国奉行(隆吉)
菊池伊予守

御目付(備德)
沢 勘七郎

大坂表江急々可被差遣候条、可致用意候、

右於新番所前溜、河内守申渡、稲葉兵部少輔侍座、

同廿七日

河内守宅江家来呼可渡書付、

酒井若狭守江

松平肥後守京都守護相勤候内、其方義京都御警衛被成御
免候、

御座之間

陸軍奉行

步兵奉行 兼帶
御勘定奉行

町奉行
小栗豊後守跡

講武所奉行並

講武所頭取

文書原寸 縦一六種 横六四種

三九

島津登ヨリ在藩ノ家老中へ

仏国巴理ヨリノ松木弘安書翰添

仏国ノ琉球奪取計画

三七九ノ一

講武所奉行(増巻)
大関肥後守

町奉行(忠順)
小栗豊後守

外国奉行(清惠)
井上信濃守

講武所頭取
松平 仲

御目付
塚原次左衛門

御鉄炮玉葉奉行
中川市助

小普請
初鹿野備後守支配
藤沢主税

(包紙ウツ書)
川上筑後殿

島津大藏殿

喜入撰津殿

川上但馬殿

川上式部殿

島津 登

封
(付巻)
「御内用」

松木弘安事

公義御用付、仏蘭斯其外之諸国江経歴中見聞之次第、且
仏蘭斯之教主琉球江耶蘇教を弘メ、土民ニ帰服可為致と
の企茂有之、其上近年日本乱妨之輩多起り、終に争端を
開事無疑候付、是非他国江先立て日本を伐之謀相決候付、
是より前仏国より琉球江兵卒弍千を渡し、何となく琉球
を奪取之望有之との段も、羅尼ロニと申者より弘安承得候趣
共、拙者迄別紙之通細々申越候趣相達、就而は、外夷之
内話等真偽難計候得共、不容易事柄ニ而、差当は琉球難

二通

三七九ノ二

(包紙ウツ書)

島 登様 仏朗西部ハレイス

御直披 松木弘安

〱

題筋相見得候、併此節彼地滞留之仏人等都而引弘相成候
付而は、後難も有之間敷とは存候得共、奸智深異人共故、
旁掛念之事ニ存候、おのつから
太守様

三郎様御賢慮茂可被為在御事候付、此段御内用を以申越

候条、

太守様

三郎様被達

貴聞候儀は、何分茂可被取計候、以上、

戌十一月廿八日

島津 登

川上筑後殿

島津大藏殿

喜入撰津殿

川上但馬殿

川上式部殿

文書原寸 縦一四・二種

包紙原寸

縦二八・五種

横 一一〇種

横 四一・三種

猶々

奉冒 尊威拜啓仕候、益御機嫌能可被遊御精勤奉珍重
候、次ニ私事海陸無恙通行仕候、乍恐御他念被遊可被
下候、御分袂後風波平安七十二・三日にて仏蘭斯之地
へ着任、其後英都龍同・和蘭・プロイセンより方今俄
羅斯之都ペトルビュルグ江到着仕、最早此地江四十日
計も滞在仕居、近日陸路よりポルトガル江赴候筈ニ御
座候、諸国経歴之中、龍動有名之展観場は、万国之珍物
を集め有之、蒸氣機・農具・火器類・船類・衣服類・
陶器・玻璃器・織物具・建家具・航海具等之新製之も
のを集有之、一三年前より亜墨利加・欧羅巴・支那・
日本・瓜哇其外、島々より産物を集め、此展観場ニ漏
るゝ物無之、此家も亦大にして美なる事驚入申候、扱又

英国ウールウィッチと申処は、大砲之製造所有之、近来
 發明之アルムストロングンと申大砲を造り居申候、
 此砲は御聞及之通、鉄之鍛ひ砲にして後口より長キ彈
 を裝し申候、此彈は平砲より三倍も遠く飛候故、從來
 之砲は皆用ニ立不申候とて、頻ニ此砲を造りて旧砲ニ
 取替へ申候、実ニ此砲ニ無之候而は相成申間敷存候、
 乍併此砲を造立候には、ストームハームルと申蒸氣之
 仕掛ニ而鍛ひ候槌無之候而は、逆も人力ニ而作候事出
 来不申候、且又近来亜墨利加南北にて大戦争有之候中、
 モントルと申候鉄之蒸氣船を造り、其船之先キを尖ら
 し、直ニ敵船に衝掛て之を碎き申候、北アメリカにて此
 船を以屢勝利を得候ニ付、英ニ而も此船を擬造し、鉄
 之厚サを五寸許りにして、前条之大砲アルムストロン
 グゴンの彈を打掛相試候処、四度目ニ而彈漸く内側ま
 て通り候由、右二具は近来歐羅巴にて争ひ作り居申候、
 右ニ付一洋人之説ニ、日本は幸ヒ軍艦無之、軍艦は価
 貴く、且十艘之軍艦を造るよりも、鉄造之モントルを

造ること最宜しと申居候、

一御国之義ニ付、大切之事承候ニ付、態々此節呈書仕候、
 右は琉球之事ニ而、先年より仏蘭斯之教主參り居候は、
 實は琉球に耶蘇教を弘め、土民を帰服せしめんとの企
 ニ相違無之、右之義ニ付、仏蘭斯江極懇意之者有之、
 平生日本語を学、兼而日本の事を執心ニ致し居、我邦
 之事ニ就而、内々密事を明し申候、其名を羅尼ロニと申居
 候、漢字も能書キ、且ツ支那・日本其外之新聞紙を著
 し候者ニ御座候、扱当今之フランス帝ナポレオン三世
 は先一世帝にも劣らざる雄傑にして、方今アメリカ之
 メキシコに兵を向け、既ニ之を傾けんとし、既ニ支那
 にも英と力を合せ、安南は既ニ所有となし、以後之所
 謀至而大なる由、右ニ付近年之中必ス、日本ニ而乱妨
 之輩多なりて、終に争端を開くこと疑なき由を看破し、
 是非他国ニ先て日本を伐んとの遠謀既ニ決し居、是よ
 り前に琉球江兵卒二千を送り、何となく奪ひ取るの所
 望なりと云、故ニ右ロニなる者秘に云、吾はフランス

帝の内謀を打明け、吾本国ニ不忠を行ふに似たれとも
帝は望過分にして、吾か慕へる日本にまで及はんする
なれば、曾テ書を以て度々諫めたることあれとも、既
ニ志決しぬと答ありたり、故に速に琉球に警固之兵を
多く送り、砲台を造りて堅固ニしたまはずば、必ず仏
之手ニ落んこと、種を旋すの暇なかるへしと云、琉球に
来れる僧の名を Funet ヒユレと云、ローマカトリッキ
教ニ御座候由、右ロニと申者、平日懇意ニ有之、此僧
至而人物も宜敷、始終此ロニ江音信有之候由、右ニ付
ロニ筆を取り書して曰く、不可殺之と申居候、扱右様
仏蘭西より琉球を望み居候義、此地ニ而承候ニは、急
度致したることニ御座候間、若永く御所領有之候 思
召ニ御座候ハ、台場を御建築ニ相成、常に許多之兵
を御備有之候様奉存候、右仏人も申居候、武備相調候
所江は、容易に手を出し不申、阿蘭陀^ヲ杯は小国ニ候得
共、稍武備調候故、手を出し候而も怪我多く候間、打
捨置申候、雖然、メキシコ・安南・支那杯は何之備も

無之候故、遠方迄船を出して伐ち申候由、

扱来年は弥仏蘭斯より朝鮮江兵を向け申候手当ニ相成
居候、去年対馬江ロシア人参り候義も、右ロニ之建議
より起りたる事なりと自ら申居候、仏ニ而先対馬を取
り、仏領とせんとの兆有之候故、ロシア人聞之、他人
に取れては叶わすと存じ、妄りに先ンじ候由、いかに
も垂細細人は愚にして遠慮なく、外を知らずして自ら
知とし、旧法に拘泥し、古今を弁せず、常に夷狄との
み唱へ居候故、此夷狄の為に敗を取り申候、此節支那
は敗潰之後、英仏と条約を為し、英国之政道に基きバ
ルレメントと申議政堂を取建居申候、始め夷狄と唱へ
居候得共、今に至り何故ニ夷狄之政道に擬ひ居候哉、
外を知らざる者之日本魂は全く支那人と同様ニ御座候
扱歐羅巴諸国巡視仕候処、兵備十分相調居驚入申候、
之を我邦に比し度存候得共、万一とも難申、曾て我邦
ニ而慷慨之士杯と唱へ候者、虚文証言を陳し、螳螂を
張り国法に触るゝ等之事、実に可笑之至ニ御座候、ロ

シアニ而は即刻四十万之兵出申候由、先日茂帝自ら号令ありし訓練を見申候、此時は此都ペートルビュルグ

江罷居候兵六万出申候、今六万之兵を全日本中より即刻に出すこと甚六ヶ敷存居申候、尤江戸之人口は三百万も可有之候、此は扱置、御国ニ而例せんに鹿児島中人口十八万有之、其内一万を武士とし即日此士を出して戦わしむること出来可申とは存不申、況や武備なき処は百人之兵を満足に操出し候義、難かるべく奉存候猶又、右等之事御勘考奉察候、右我邦之兵調ひ難き義ニ付、欧羅巴ニ而見分仕候事多有之候得共、此等之寸紙ニ書尽し不申候、

扱此節欧羅巴江使節御遣ニ相成、交易向並蝦夷之事等御談相成候廉は、始末甚長く候間不申上候、いつれ十二月中には帰朝之筈ニ御座候間、近々奉得拜願緩々述珍事候様可仕候、右緊要之義ニ付、其内申上置度如斯御座候、恐惶謹言、

八月廿一日 俄羅斯都ペートルビュルグにて相

認

松木弘安

島 登様

御取次衆中

紙端相殘置候ニ付、再申上候、前書はロシアニ而相認置候得共、同処より便無之候ニ付、其假差置申候処、八月廿四日、右ロシア都出立、同廿九日、再ヒハリス江参り、此処より御通信申上候、扱此地江参り承候処、江戸ニ而東禅寺之英人切害ニ逢候以来は、外国人横浜江引退候而、各其本国江軍艦を乞候而、大坂江差向、京師江参り、皇帝之条約を求候賦之由、右様相成候而は將軍家ニ而茂其假には差置難く、且諸家之人とても之を怨み、終に兵端を起し候期ニ到り可申、何分危篤之形勢ニ有之候、ロシアニ而は次第ニ支那之陸地より日本ニ及はんとし、仏蘭西ニ而は之を恐れて、俄に對州或ハ琉球ニ抛らんとの企有之候、唯初ニ兵を交へ候者は仏ニ相違無之様相考居申候、何ニ致して茂兵馬堅

強ニ無之候而は敵候事無覺束、近日之我國之様ニ無思之輩妄りに征夷ヲ唱候事可笑事ニ御座候、此地ニ而支那人之知己有之、曾テ全文那無稽之輩多きを嘆居申候、今は既ニ覆り、鎖國之頑論も主張出来不申、全国潰乱可鑑と奉存候、

仏國羅尼所訳之新聞紙、但閏八月七日より四五日前ヲランスニ而所刻、

一 欧羅巴ノ使節日本ニテ悪シキ取扱ヲ受ケタルカ故ニ、
仏政府ニテハ支那ノ軍艦ヲシテ日本ニ至ルヘシト命シ
タリ

一 外国人日本ニテ心ヲ安シセス、故ニ近日必ス、大騒動起ラント思ヘリ、○日本ノ大名欧羅巴人ヲ其国外ニ追出サント欲ス、又此大名ハ大君ノ權ヲ奪ハント欲ス、何トナレハ大君將軍ハ外国人ヲ日本國中ニ置クコトヲ免セハナリ、○欧羅巴ノ諸使節江戸ヲ去リ横浜ニ行ケリ、其故ハ横浜ニテハ使節ヲ防ク為メノ軍艦アレハナ

リ、○右使節、少シノ武士ヲ以テ其家ノ周囲ヲ護ル、此武士ハ裝束セル砲ヲ備フ、若シ事アレハ之ヲ放ント欲ス、然レトモ今ハ悪事ナシ、○今平安ヲ嫌フ日本人多ケレハ、外国ノ政府ニテハ之ヲ打捨置キ難シ、

一 日本ヨリ三書到来セリ、此國中ニテ暫時ノ内大騒動アルヘシ、○日本帝ハ江戸ニ使ヲ遣ハシテ、大君ハ帝ニ對シテ何物ナルカラ知ラシメント欲ス、○又政ヲ改メントスル天下ノ最モ強キ大名京ニ至レリ、其京ノ周囲ニ多クノ武士ヲ遣ハシタリ、○京ノ民上下共ニ帝ヲ好ミ、大君ヲ好マスシテ最モ怒リオレリ、○長崎ニテ仏國ノ水夫二人、日本ノ取締役二人ヲ殺セリ、其仏人ハ
條約ニ從ヒ罰セラルヘシ、

一 閏八月九、今欧羅巴人日本ニテ其生命ヲ保固シ難シ、故日新聞紙ニ欧羅巴人江戸ニ留ルヘカラスシテ、横浜ニ至リ仏船ニ乗レリ、故ニ暫時ノ後、日本ニ悪事アルヘシ、○若シ大君外国人ヲ日本ヨリ追ヒ払ハザレバ、大名ハ帝ヲ懷キ大君ヲ惡ミ、大君ノ位ヲ奪ハントス、○此事イカ

ナル結果トナルヤ詳ナラス、○此事ヲ支那ニ在ル仏国

ノ軍艦ノ総督聞キテ、日本ニ多クノ軍艦ヲ送レリ、

文書原寸 縦 一六・七種 包紙原寸 縦二七・五種

横 一四四・三種 横 四〇種

三〇 岩下高崎ヨリ中山大久保へ

久光公御上京ノ件

(包紙ウツ書)
御国許

中山中左衛門殿 江戸 岩下佐次右衛門

大久保一蔵殿 御内用

(朱)
「壬戌」

十一月晦日

勅使御下向以来、種々儀論も有之候段は、吉井中助(友吏)より

委細御聞取ニ相成候半、其後既ニ板倉出職、一橋公暫御

引籠、此節亦々御登城相成申候、先日より越・土両老公

御尽力ニ而、一橋公初閨老等之処、至極之御同論ニ相成

之由、今日越前横井平四郎(小梅)より承存申候、就而はいつれ

明春早々、越・土等上京、大決策有之筈之由、右御着以
前ニ是非ノ

三郎様御上京相成居候様可申上旨、呉々も横井より承申
候、越・土両老公、以之外ニ

三郎様を御渴望之由ニ御座候、右ニ付態々急飛脚差立候
間、十分御尽力可被下候、御上京ハ正月廿日迄ト申候事

ニ御座候、此方ハ正月七日方ニ御発駕之内決之由、
一勅使御入城も廿七日無御滞相済申候、

將軍様も御玄喚迄御送迎有之、

勅書御渡等之式茂余程尊崇之体ニ為有之由、

勅使ニも是ニ而御安心出来候由、御嘶も御座候、攘夷

一条ハ暫時は異論も起候勢之処ニ、先於閨東御受、諸

侯へ布告ト申迄ニ而、策略期限等ハ、明春上洛之上、

猶又、

叡慮をも相伺、衆議ヲ尽候上ニ而可申上との事ニ相成

候筈御内定之由御座候、是ニ而両方御熟談、都合宜敷

相成申候、

一彦根侯一列・高松公一列等御科目被仰出、是等ハ全將軍様御自身より之思召付ニ候由、尊

王之思召至極厚由ニ御座候、決而虚説ニ而ハ有之間敷候、

一大赦も仰出相成候、水府も因州公至極之御尽力ニ而、

能都合ニ成立候而、大場(景教)・武田(正生)・岡田(徳至)三人復職相成候

由、尾州も能相成、田宮弥二郎先日致出府候、其外為

差異事も無之、委細は別紙ニも申進候、何分ニも御発

駕之處、御尽力可被成候、以上、

十一月晦日

(方平)
岩下佐治衛門

(五六)
高崎猪太郎

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一八二号

文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一四糎

横 一八二・五糎

包紙原寸

縦 二八糎

横 四〇・五糎

三 江戸高崎猪太郎ヨリ中山大久保へ

久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ツク書)
〔御用部屋〕

中山中左衛門殿 高崎猪太郎

大久保一藏殿 御用

〔朱〕
『壬』戌霜月晦日発(印)

自東武

緘

爰許形勢日ニ増盛大

大樹公御麻彦茂御平快、去ル廿七日、御入城送迎之

式法、実ニ尊崇之誠(徳)権相頭、始て君臣之名分明ニ罷成

誠徳川氏之盛事、此事ニ御座候、

勅使ニ茂意外之尊崇、御感服之体ニ御座候、左候而、

攘夷

御親兵之一条、大体御請相成、折角早目 御帰京之御心組ニ被窺、至当之御事哉と奉存候、右之策略緩急拒

絶之期限は、来早春御上洛之上、可被

仰上との模様ニ御座候、近々御聞及候半、井伊・安藤之巨奸夫々御処置相付、誠ニ愉快至極、実ニ賞罰其処置を得候と申べし、即今無態、眉を焼之勢、幸哉、大樹公殊更御賢明、是迄之 御失体儀、其罪を被為悔、去ル廿日、高家を京都迄被差立、官位一等を御下り、罪を被謝候、是は全 御自身様之肺腸より御発起ニ而、何ぞ越・土両老之輔佐ニは無御座候、誠ニ感激不少、是も徳川氏中興之表端欵と被察候、

一吉・中早疾着相成、爰許事情遂一御承達候半、越・土両老至極之誠忠、幕政之振興茂全此両公之尽力周旋ニ相依る事ニ而、弊夫共ニは追々被召出、何欵御相談等茂有之、亦は建言之趣茂有之、誠ニ過分至極、いづれ天下之事は、此両公なくんば分裂相違無之、然処我三郎様御事、初発少々如何か之御疑念之廉も有之候由ニ而、段々両老公より御尋問之趣有之、弊夫見留候丈は、力を極めて弁解仕置候処、只今ニ而は、右両公始

一橋公閣老等ニ至迄、三郎公ならされば、天下之大事を統理する事あたはず、公武御一和之道も居合不相付との御依頼ニ相成、三郎公御上京一日三秋之如く御待相成、一日は一日より茂早く御出京御渴望ニ而近々御噂承候、右ニ付段々被仰含趣有之、明日明後日中には、弊夫発足之心組ニ御座候間、多分来月廿日前後ニは着可仕、爰許も僅兩人ニ而、毎々朝未明より諸々へ出掛、一寸之閑暇も無之、迎もはつされ候丈ニ無之候へ共、右之御用難黙止、不得止発足之積ニ決定仕候、依之無申上迄茂候へ共、一寸茂早目御上京相成候様、御促し被下度、越・土両老公より御書も御遣し相成候積ニ御座候、此節之急飛脚、全御上京迅速之処、懇願之為ニ御座候間、無御手拔筈ニは候へ共、様々ニ御尽力奉至願候、不遠拜眉縷々可申上候へ共、其内あらく右之趣為可奉得御意迄ニ御座候、外ニ段々深重大之事件御熟論仕度趣有之候へ共、特面あらてハ難申尽候、乍末筆至御保衛專要候、一々不所思候、頓首、

成十一月晦日

高崎猪太郎

友愛

中山中左衛門様

大久保一藏様

侍史

文書原寸 縦

一九種

包紙原寸

縦二八種

横一九二・五種

横三九種

三三 軍役奉行軍賦役ヨリノ砲台建築意見書

格別成御城下御警衛之台場ニ御座候付

御先代別而調等被仰付候訳茂有之候得は、追々西洋各国之制ニ一倍十分之御備御出来相成度儀御座候得共、不經數年候而は不相濟事御座候得は、其中不容易御時節ニ付而は可也新ニ台場御出来之分、左条之趣を以、御仕立可相成哉と奉存候、

一急速御出来可相成御台場之趣意は砲數之多少ニ不依、第一守兵之輩覘打方令練熟度、就而は夷賊之砲丸相避候は第二第三之事ニ而何より我砲發之手続便利ニ出来



候様、万端築方ニ茂吟味仕度御座候事、

一惣土居之高サ式間位、右浪打涯より築立度趣意は、鳥島・袴腰双方之地形赤水・神瀬之間通行之賊を防は扱置、次ニは御城下江寄たる夷船、摸様ニ依而沖中江漕出し、矢比ニ近付たるを見て、一勢ニ打挫くためなれば、少ニ而茂海上に突出候様仕度、尤高サ間位天然之險有之候得は、別ニ築立ニ及間敷候、右土居彼を防之ために非ず浪よけのために仕度御座候

一間之土手四方幅三間ツ、高サ卷間三尺、三方は竹之しからみ敵付、一方は砂土居地形ニ依而用捨
右は大砲打手之人数打放之節、彼か砲丸を防き避るために非ず、食時休息或台場守兵として別ニ小銃提、彼か上り涯を打候ための者敵合遠き間ニ其中ニ相備るため也、

一大砲拾式封度以上拾式挺位、内鳥島江四挺、袴腰下江八挺只今御在合箇ニ而可也、御不足有之間敷奉存候、一台場中火薬庫衆溜小屋前は勿論、其外ニ而茂天然之

險無之所は可相成は敵付方土居を築、竹木植付夏向之日よけ、且は賊之火攻を防候用ニ備度御座候事、但大概絵図面之通仕度御座候、

一右ニ付台場守衛之面々休息食時或提銃ニ而上り涯を打候輩は、土手小屋内等ニ而悠々氣力を養候儀勿論ニ候得共、賊船を覬打するに至而は心静ニ必死を極め我大砲を以彼か大砲を破り候格護せしめ候儀肝要と奉存候右之通此節御台場御築立相成候共十分之事ニ無御座候付、往々は左之通御造築有御座度候、

一神瀬外廻江杭を打、干寄相付度候、

一調練場下神瀬江相對候海中、凡八拾間余遠干瀉御座候付、右江茂同様に寄付置度候、

一当分甲突川筋砂揚之場を御先代様御試被遊候器械を以川渡いたし候得は、自然と神瀬と之間暗礁可罷成儀と奉存候、

右は

御先代様

思召之通、神瀬并赤水・烏島・城山下各一ヶ所も都合四ヶ所之台場御造築罷成候得は、充分之御台場可罷成事御座候、乍然俄ニ右等御取立相成儀は誠ニ不容易御事御座候付、即より右通御手を被付候ハ、往々于寄付候上神瀬御築立相成候得は、人力を不勞候而自然其功も相立可申哉と吟味仕、此段申上候、以上

戊十一月

御軍役奉行

御軍賦役

(付紙)
一烏島四挺

一三拾六封度 式挺

右佐多御備付之内より考挺 垂水右同考挺

一拾八封度 式挺

右調練場御備付之内より考挺 大根占右同考挺

袴腰八挺

一拾式封度 加農三挺

右内之浦御備付之内より考挺 串木野右同考挺

垂水右同沓挺

一拾五拇忽砲 三挺

右大根占御備付之内より沓挺 阿久根右同沓挺

出水右同沓挺

一百五拾封度 沓挺

右鶴江御格護之内

一八拾封度 沓挺

右同

文書原寸 縦一四・四種 付紙原寸 縦一四・五種

横 三三二種 横 六一種

三三 屋久島物産経営ニ付松岡十太夫ノ上書

(表紙) 上

屋久島雜木山之儀、太粧之鹿倉ニ而柞樫類之大木立
込、右伐難候而も、土人之差障ニ相成候廉無之様ニ
承及、夫々木柄ニ応候産物御仕立相成候ハ、當時

柄屹と 御国益可相成哉と奉存候間、愚存之程奉申

上候付、御見合之端ニも罷成候得は難有奉存候、

一山産物之内ニ而も柞灰は 御国産第一之品柄ニ而、全

体柞は 御国地方ニ為限程之木柄ニ御座候間、肥前表

之瓷器之上製ニはいつれ共、 御国柞灰召仕不申候而

は、出来兼候由ニ而以前より 御国より被差出申事ニ

御座候、

順聖院様御代ニ肥前ニ屹と御約定ニ相成、日州御手山

より三千箱位ツ、年々被差出、其以前商売山柞灰は

沓箱之前錢沓貫七八百文より式貫文位之由御座候付、

他国出被差留、右之通御手山上製迄箱数を限り被差出

候間、於肥前別段ニ直組引上、当分ニ而は沓箱之前、

三步式朱位ニ相及候哉ニ承及申候、右之通之御治定相

成、夫故直組も引上候而は、右直組ニ差障可申廉も可

有之哉と奉存候間、此已前下町人島名伊右衛門と申者

肥前役方江懇意之由承及候付、此者へ相尋候処 御国

柞灰は上製之瓷器迄召仕、余は近国出産を以相弁申事

之由申候、右ニ付而ハ三千箱之直組ニ不差障候ハ、
屋久島を可差出、彼表仕掛之上相当之直組相成候ハ、

一 廉之益分は相満可申哉と奉存候、

一 椎皮・揚梅皮はいづれも相応之品と承及、直段ハ委細
不存候得共、剝調相成候方可宜哉と奉存候、

一 櫓有之候ハ、櫓ニ取仕建、椎は櫓腕ニ取方之上、江
戸表へ蒸気船より被差廻候ハ、相応之益も可有之と
奉存候、

一 櫓は油道具、其外柄木類之見合可相成哉と奉存候、

一 現事見分不仕山故、外ニも用立仕様可有之と奉存候得
共、太粧右之通ニ而木費無之様白炭黒炭焼調、御国用
分外は長崎へ被差出候ハ、相応之益分相備可申哉と
奉存候、

但杵椎之類、皮を剝候得は炭焼調候節、板割れに相
成候由承及候得共、皮ニ而別ニ益を取候付炭位少

シ劣可申と奉存候、

一 右御取扱は 御手許御計之方可宜と奉存候、何分日州

御手山方より直組等之儀ニ付申立可申哉と奉存候、

一 御趣法方ニ而取扱被仰付儀ニ御座候ハ、御内用計御
手山と被仰付、上下町人之内より支配方被仰付度内願
之者も有之哉ニ付、右へ支配申付、詰屋久島奉行并右
山床之相掛候村々江相詰候見聞役江詰中掛被仰付、産
物取仕建之儀は支配方之者江任置、毎納費筋無之様取
仕建、右奉行見聞役は、見分送状迄と申様被仰付候ハ
、品々着之上捌方時々承届、地売他国売出等為仕申
度、尤仕込ニ付、本手金相応相掛申事御座候間、支配
人共自分之仕込ニ被仰付候ハ、右利益之内より何程
御内用金より被差出候ハ、何程と多少を相究、島許
仕込之次第、且は運賃等時之奉行見聞役より承届置候
ハ、差引益分は相分可申候付、右之仕向ニ而は同様
可有之哉と奉存候、左候而右之益分は別段差分置、何
そ之御用途ニ可被差向哉、左候ハ、屹と御役ニ相立
候儀ニ而は有之間敷哉と奉存候、

一 屋久島之内手広之山野御座候由ニ付、右支配人より自

分失脚を以栢植付被仰付、成長之上成実は詰奉行并見聞役差引ニ而鳥許江垂蠟所取仕建、永久右仕立之者共支配と被究置候ハ、近年中御役ニ相立候様仕立可申儀と奉存候、

一 椿并荏子植付方之儀は支配人より土人へ致教諭、往々は土人之勝手ニ相成候様、買入呉候ハ、相植申度奉存候、

一 屋久島深山難場之処へ屋久杉大木倒木有之、中々取出方六ヶ敷候由ニ而、棄物ニ相成候由、是は支配人現事見届罷登候ハ、決而便利之器械を作調差下候ハ、出シ方相調候訳も可有之哉奉存候、

右は現事見届不申候場所故、承得候形行を以相舍居候愚存之趣奉申上候間、此之外ニ別ニ格別成益筋も可有御座哉奉存、極内此段申上候、以上、

戊

十一月

松岡十大夫

冊子原寸 縦二六・五 横二〇・五 五枚

六四 記録奉行伊地知小十郎ヨリ藩内寺社ノ文書等調査条項通達

(表紙)
一 諸郷寺社為見分廻勤ニ付糺方ヶ条書

御記録奉行」

此節就 御内用 御領國中寺社見分被仰付、近々被差廻答候間、日限等之儀は至其節別段先状可遣候得共、御用筋之次第各心得ニ茂可相成、大概左之通申達置候、
一 当戊九月 御筆仰出御条目之中、神社之事方今不容易世態相成候付而は衆人尽精力候儀は勿論ニ候得共、
皇國之儀は神明之威力を以夷賊降伏之先蹤茂有之事候条、領國中事立候大社修造行届兼候処は此涯取調、且旧來之祭礼及闕如候茂有之候ハ、是亦取調、早々可申出旨被 仰出候、 御家之儀は 御代々様右通神仏御尊敬被遊成、毎年正月御吉書ニ茂神社仏寺之修造興行を專ニ被為書、御元祖様御誕生之時稻荷之擁護被為在、御入國之始より稻荷・諏方・愛染明王等御創建被遊、

御危難之折ニは日吉社江本堂可被造立御誓願も被為立

其御願文以來御代々様此類諸所ニ有之、殊更

日新様 (馬津忠貞) 大中様 (義久) 龍伯様 (義弘) 惟新様 中納言様杯 御出

陣等之度毎御跡先ニ付御誠実之御願文等神社仏寺江段

々相残、皆靈感奇驗幾度茂被為在、就中泗川御城江明

兵數百万攻寄せ、別而御危難之時ニ当て赤狐白狐敵中

に駆入、其塩合に城中乘機一同御討出、八万余級被為

切捕、御名譽被為振天下候事共世人普く奉存通ニ而、

古來神社由緒等追々被相糺、神主・住僧等よりは是迄段

々申出趣も有之候得共、或は前々古帳留其假書写、或

は書留無之迎疎略ニ申出、或は棟札等文字難見分迎言

伝等之趣を以書出候類多々有之、何分ニも取究候程之

証拠相少ク候間、此節之儀は古棟札・古鐘銘・古文書

古書留等ニ專氣を付帳面取仕立、左之通可糺置旨神主

住僧等へ能々論置候様可取計候、

一全体社領は文録年間毀破勘落以後、元和五末七月四

祈願菩提式ヶ寺江は三分一ツ、可被殘置旨被仰渡候、
其節殘高之員數何程ニ候哉可糺置事、
一諸所神社大小無殘可書出旨川上因幡殿・北郷佐渡殿・
穎娃左馬殿・山田民部殿御連名ニ而寛永廿一申三月御
廻文を以被仰渡候、其節之古帳留等有之候哉可糺置事、
一御領内絵図 公義江就御調進、諸所寺家庵地迄大小共
不殘寺号・山号・院号可申出旨、正保三戊五月島津彈
正殿より被仰渡候、其節之書留有無可糺置事、
一御領内惣高究ニ付、寺社家并門前屋敷までも銘々不殘
相改、祈願・菩提所等寛永十年御檢地ニ茂竿不被入所
於有之は高員數見計帳面外ニして可申出旨慶安五五月
高崎惣右衛門御取次を以被仰渡候、其節之書留等有無
可糺置事、
一神社仏閣修理再興之儀は雖為國家之御祈禱、近年江戸
御失墜不大形故修補難調、神社仏閣有之儀不可然仕合
ニ候間、毎年為修理料御領内人数皆同一人ニ付、其分
ニ当年より被相定候旨、承応二己九月島津図書殿・北

郷佐渡殿・町田勘解由殿連名之御廻文を以被仰渡、当
文久二戊年迄式百拾老年相成候、其間再興修造及幾度
候哉可糺置事、

一 諸所神社并堂宮寺院迄大小共無残御糺ニ付、神社江九
ヶ条、堂宮へ八ヶ条、寺院へ拾ヶ条ノ某々御問条相付
三再之案文を以応ヶ条相改、逐一可申出旨、明暦元未
七月鎌田筑後殿御廻文を以被仰渡候、其節之扣留有之
候哉有無可糺置事、

一 諸寺鐘之銘并額文字等入念可写出旨、同年未八月右筑
後殿御廻文を以被仰渡候、是亦其節之扣留ニ而茂可有
之哉有無可糺置事、

一 諸所祈願・菩提御檢地竿被相除、惣高之綱ニ落居候間
急度竿入可書出、乍然前代より竿不被入寺は以見計畦
段可書出、右外之寺社家は知行為被下分居屋敷被下、
其外は前々より御免逆茂証文無之候ハ、被召上石地ニ
して可罷居、但祭米又ハ御修理被仰付候神社之社人江
は正祝子・権祝子・内侍之三屋敷は可被下、其余御免

之証拠無之候ハ、可為解地旨、万治二戊二月相良主税
御取次を以被仰渡候、右時分之古書付等有無可糺置事、

一 寺社方之儀 中納言様御代迄は御談合衆今ノ若御支配

ニ而御祈念方・御法事方は三原左衛門佐、神社仏閣修
理祭礼之事は平田狩野介・猿渡新介より寛永十六卯十
一月光久公御職分ヶ之 仰出ニ相見得、其後壹分銀之
御下知は御物座今ノ御より御支配被成候付、御談合衆
も被及御相談候上御取扱被成来候処、寛文六年八月寺
社奉行御役被召立、壹分銀差引寺社方計ニ為被仰付由
候間、此後は何篇寺社方申渡ニ而可有之候、

一 神社仏閣江被納置候太刀・長刀其外宝物類訖度不及紛
失等ニ様入念可格護旨、延宝九酉五月寺社奉行より被
申渡候、此等之帳留有無糺方之事、

一 元禄九子四月御城回録後同十丑四月御領国中文書・旧
記等為見分先役肥後仁右衛門・市来源右衛門兩年ニ被
差廻候、其節帳留等も可有之有無可糺置事、

一 依郷而は地頭仮屋へ帳藏致造立、半櫃類ニ古帳留等段

々入付有之郷茂有之、或は先祖代暖役等為相勤子孫江
持伝候郷も有之哉ニ聞伝居候間、其類も致探索、古日
記・案内文留・御通達留・御廻文留・高帳・札改帳杯於
有之は、何年間、何之帳、何冊と頭書ニ而書載置候様
可致置事、

一前件事立候大社は何れ延喜式・三代実録等ニも被載置
候神社ニ而、祭神は某々大官司申出通之筈候間、祭神
木像之後背、亦は台座之下杯ニ何ぞ銘書等は無之哉、
大小社共能々入念相改、文字之有無可糺置事、

一諸寺院之仏像等茂右同断、

一神仏之像計ニ茂無之、不限神社惣体御宝納相成居候御
太刀類、其外金幣・経卷等ニ至り、外家箱之内外迎も
氣を付、文字之有無前条同断、

一寺社共 御代々様御名判等之御願文又は御寄付高、或
は御寄進品等之御証判正文之有無前条同断相糺之古字
ニ而茂可糺置事、

但御家老衆連判等ニ而、右或為被仰渡茂於有之は同

断、

一寺社共当分之宮作、其外鳥居・囲垣等何年間之修造ニ
候哉、棟札等新古共不残取揃可致糺方事、

一古来より為被建置鳥居・囲垣等当分無之、神社杯於有
之は其為取除年間、且其訳筋も可糺置之、且祭札等も
昔年之式法より当分軽目為相成も於有之は何年間、何
様之訳ニ而相替候哉可糺置事、

但寺院庵地之儀も、古来より御免地ニ而此前為立居
も、当分廃壊して無之、或は寺家乍有之無住等相
成も候へ、是亦同断、

一大小社寺院等ニ抱わらず 御代々様御尊敬為被遊趣証
拠相知候御文書・棟札類ニ而も於有之は堂宮迎茂可糺
置事、

右は此度諸郷寺社為見分被差廻候付、大概御用筋右ケ
条之通前広申達置候間、細蜜遂吟味每郷一帳取仕置、
万端無抜目様相糺、応ケ条逐一有無之訳書載見分可相
待候、是迄開基年月等不相知向ニ為書出内ニも、厨子

裏又は木像後杯ニ明白書記、或は文字不相知と為申出
棟札等ニも分明相知居、或は帳箱等ニ余多帳留乍有之
搜観不行届郷役も間々有之由候間、瑣細可入念事肝要
候、何れ不遠中ニは拙者被遣儀可有之候付、其節右之
帳面可差出候、尤寺社方掛は勿論、兼而所中ニ而右体
古事ニ委敷為取馴人柄は及吟味、其外神主・住僧等之
外猥ニ他見無之様可致取扱候、為念此段も申達候、以
上、

但取調方御急之事候条、早々糺方埒明候様專一ニ候

事、

戌十一月

御使番御記録奉行勤
伊地知小十郎

冊子原寸 縦二八・五糎 横二〇糎 一三枚

六五 中川宮ヨリ久光公ノ上京ヲ促サル、御伝

言

正親町三条卿ニ茂

宮江御出ニ相成居

先日は御懇諭被成下、別而辱、此節は当地之形行旁申上
越度候得共、急速出立故御直ニ御聞取可被下、此節は不
容易被為蒙

御沙汰、実ニ結構之御事、何卒急速御上 京偏ニ待上居
候段可申上呉、乍序御伝言申上候との御事ニ而候事、

十一月

文書原寸 縦一六糎 横三九・四糎

六六 薩藩ヨリ近衛閑白ヘノ建言(?)

浮浪取締ノ件

(備異付箋)
「御沙汰書」

(朱)
「壬戌十一月」

弊政一新之機会ニ乗じ、都下狡譎之徒、堂上高貴之御方
々々を不憚、無益之投書張紙等いたし、失敬不遜之語を用
朝憲を致軽蔑候訳ニ相当り候、且亦市中繁華之地ニおひ
て、無頼之少年共、兒女を嚇し市人を悩し、或ハ薩長土

三藩之名を偽設、大ニ士風を損候次第不堪傍観、此已後
右様之妨いたし候者於有之は、町奉行より逐穿鑿、屹と
取締、正邪分明ニ賞罰之道相立候様、武辺江被仰出度奉
存候事、

真言宗

十一月

文書原寸 縦一六・二種 横五八・五種

表七 鹿兒島城下寺院調査寺社奉行届書

(表紙) 寺院しらへ帳 一

吉祥院

住持真海

大乘院

住持寂如

大乘院門中

築地

抱真院

住持寿明

稻荷社脇

宝持院

住持騰周

福ヶ迫

普賢院

住持恵刀

後追

勝軍院

住持宥尊

田之浦

潮音院

住持覚亮

天台宗

南泉院

住持智融

南泉院門中

野田山内寺より兼帯

観樹院

実相院

住持郷芳

坊中
善聚院

住持盛真

坊中
延寿院

住持純応

坊中
善行院

住持盛盤

坊中
西寿院

住持亮海

坊中
威光院

住持盛応

坊中
千手院

住持義典

坊中
薬師院

住持快繁

坊中
福蔵院

住持覚政

坊中
松本寺

住持快阿

坊中
文珠院

小林観音寺より兼務

後迫
護国院

住持堯宣

柿本寺

住持騰岳

豎野
宝珠院

住持快道

田之浦
永福寺

無住

大乘院内

正岳寺

寺番国分重蓮寺

冷水

光明寺

住持盛孝

築地

澄心院

破壊地

下荒田

正宮司坊

破壊地

下荒田

権宮司坊

破壊地

曹洞宗

福昌寺

住持仁山

福昌寺末寺

南林寺

住持源量

妙谷寺

住持寛山

興国寺

住持泰有

惠燈院

住持常明

塔司

深固院

住持観翁

草牟田

隆盛院

住持祐頌

磯

良英寺

住持洞岳

塔司

月香院

住持太許

塔司(兼)

花舜軒

住持義諦

南林寺塔司

源舜庵

住持禪甫

武村

笑岳寺

住持辺山

武村

薬王寺

住持貫道

新照院

上山寺

住持黙如

新照院

大徳寺

住持円如

福昌寺塔司

了性軒

住持林山

字參軒

住持祖泉

実相軒

住持道雪

大翁軒

住持龍心

石心院

住持玉峯

松月亭

住持悦道

得水軒

住持日産

花翁軒

住持魯參

昌山軒

住持仁諦

靈鷲軒

住持義山

延壽堂

住持耕田

了寂軒

住持成州

福昌寺末寺

内之丸(性)

珪樹院

住持惟山

唐湊

金光院

寺番惠隆

川上村

川流院

寺番道參

内之丸

翁心軒

無住

吉野村

立山寺

武村

護生寺

無住

福昌寺塔司

梅春院

住持洋州

龍護院

住持透山

嶺鷲院

寺番篤中

福昌寺末寺

南林寺塔司

妙仙院

住持黙来

桃仙院

住持金鳳

月松院

住持栄峯

実性院(箱之)

住持黙禪

高岳院

住持泰運

長昌院

住持良眼

放光院

無住

靈光院

無住

随岳院

無住

中本庵

無住

宗慶寺

無住

福昌寺末寺

南林寺末寺

草牟田

誓光寺

福昌寺末寺

妙谷寺塔司

上伊敷村

不動院

住持来禪

下伊敷村

笑拈寺

寺番禹禪

寺番寬龍

小野村

重陽軒

寺番寬龍

福昌寺末寺

興国寺塔司

俊翁軒

無住

不遷院

無住

浄土宗

不断光院

住持安誉

不断光院門中

山之口

称名院

住持性誉

宝樹庵

住持最誉

知月院

住持真誉

孝源院

住持戒誉

右三ヶ寺不断光院塔司

山之口

孝林庵

破壊地

豎野

専称庵

破壊地

不断光院下

明王院

破壊地

時來宗

浄光明寺

住持碩門

浄光明寺末寺

本立寺

住持弁敬

海蔵院

住持廓珍

江月院

住持愍遵

護信院

住持 惠祐

芳林庵

住持 察淳

法性院

住持 悦道

東海院

鑑司 賢教

円覚院

鑑司 悦門

龍巢軒

無住ニ而浄光明寺隠

居 罷居申候、

右八ヶ寺浄光明寺塔司

小山田村
安養寺

住持 玄道

華野村

福泉寺

鑑司 全栄

比志島村

長伝寺

住持 養順

天神馬場

梅林寺

鑑司 恵純

新照院

天永寺

無住

黄壁派(樂カ)

千眼寺

住持 龍潭

千眼寺末寺

西田

西田寺

住持 東洲

右同

了性寺

住持月巢

郡元村

延命院

寺番劍連

千眼寺塔司

蘭桂院

鑑寺千能

西別府村

東岳院

破壊地

千眼寺塔司

智福院

住持祖宗

一乘院門中

真言宗

稻荷馬場

大興寺

住持覚道

韮韃終々

智恵光院

住持堯善

稻荷馬場

松樹院

住持快海

臨濟宗

大龍寺

住持玄穎

黄壁派(粟カ)

千眼寺より兼帶
寿国寺

寿国寺触下

磯

月船寺

鑑寺梅重

寿国寺末寺

武村

玉藏院

住持玄之

右同

龍吟寺

住持祖全

報恩院

鑑寺関宗

長寿院

破壊地

右式ヶ寺寿国寺塔司

下荒田

正孝庵

破壊地

薬師堂計御座候、

安養院

住持覚宝

法華宗

正建寺

住持日皓

正建寺触下

若宮社脇

妙願寺

住持日映

大慈寺末寺

臨濟宗

荒田

能学寺

住持宗悟

合八拾七ヶ寺

住持

合八ヶ寺

寺番

合拾三ヶ寺

無住

合四ヶ寺

鑑司

合三ヶ寺

鑑寺

合三ヶ寺

兼帯

合九ヶ寺

破壊地

右は御領国中之寺院住持又は兼任寺番等之訳、且破壊地ニ相成居候ハ、是又可申上旨被仰渡、糺方仕候処、御当地之寺院右之通御座候、尤諸郷寺院之儀は追而取調可申上候間、此段申上候、以上、

戌十一月

寺社奉行

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・八糎 二三枚

三六 久光公ヨリ重臣ヘノ諭旨

永年勤王ノ誠意連続云々

(包紙ウラ書)
「朱」 戊十月十一日

ノ

」

(端裏朱書)
「壬戌」

内話之覺

口達

我等帰国以來、追々天下之形勢相變り、今般猶亦

勅使被差下、攘夷之儀被 仰出、且其外非常出格之事共

多々有之、此末如何様之世体ニ可相成も難計候、就而当

は敏達之氣習ニ而

国之習俗真面目向江突掛ケ候者、得手之事候得共、永久

之良策者至リ候而者聊行届兼候間、夫等之処能々勤考有

機變之奇計者 他人之言語 我れ勢

之、勤 王之趣意無變動連続いたし候様心掛專要之事と

存候条、人ニ依リ無屹と申聞置候様有之度存候事、

文書原寸 縦一七種

横六二種

包紙原寸

縦二九種

横一九種

三九 中川宮ヨリ久光公ヘノ御伝言扣

何人歟

(端裏朱書)
「壬戌十一月 高崎左太郎歟」

宮より御伝言

寒冷之時分御盛之由、結構ニ存候、良節江御伝言之趣、委

細致承知候、決而他言をいたし不申候間、御懸念給間敷

候、病氣茂其方見る通、転医後追々快方ニ相向、其方上

京之時分は、極而薬功茂相立候事と存候間、聊茂御懸念

不給候様、返々可申上呉候、此節は又実ニ以不容易被為

蒙

天命、為天下無此上大幸と存申候、此上は片時茂早目御

上 京待上候、関東より茂追々吉左右相聞得、大慶之事

ニ候、此節は文を以御祝儀旁可申上候得共、其方出立余

急速之上不快中、旁其儀不相叶候間、此地形勢等細々可

申上候、此品甚麗抹、赤面之到ニ候得共、唯今到来ニま

かせ、不取敢通信之印迄進之候、修理大夫殿江茂宜敷此

節之御祝義等可申呉との御沙汰ニ而候事、

十一月

文書原寸 縦一六糎 横九五・五糎

三九〇ノ二 幕府へ攘夷ノ勅使差遣ニ付京都非常警衛

ノ件

三通

在京諸藩ノ滞在ヲ命ズ

三九〇ノ一

(端裏朱書)

「謹而御達シ歎不分明 壬戌十一月」

攘夷之儀、被

仰出御一定之上は、御実備不被具候而は難相成儀、追々

御手当茂有之候ニ付、於松平淡路守茂兼々京都御警衛被

仰付置候儀、尚亦於阿州は近海渡口之要所ニ茂有之候間、

其辺守衛茂被

聞召度、旁此比早々上京可有之、

御沙汰候事、

十一月

文書原寸 縦一六・二糎 横二四糎

三九〇ノ二

今般以

勅使、攘夷之事被

仰出候ニ付而は、諸蛮江漏聞難計、

帝都非常之御備無之候而は

御不安心之儀ニ付、御備之儀、同関東江被

仰出候、右等之御時節ニ付、暫御滞在有之候様被遊度

思食候事、

十一月

文書原寸 縦一六・二糎 横二八糎

三九〇ノ三

今度攘夷之儀、関東江被

仰出候ニ付、暫滞在非常御警衛被

仰出候間、格別之以

思召、来月四日巳刻参

内被

仰出候事

十一月

文書原寸 縦一六・二種 横一八・三種

三十一 松平春嶽公より島津久光公へ

久光公之上京を促す

(包紙ウツ書)

一 島津三郎様

松平春嶽

玉几下

一 翰致陳啓候、嚴寒之節ニ候処、愈御清安珍重存候、陳は爾後殊之外御疎遠罷過不本意千万存候、扱御帰国之後も天下之形勢、廟堂之光景も種々転換有之、何分危急切迫之秋と相成、

天使御下向、降

勅之御次第も不容易事共ニ有之候、乍併天下之人心、如当今義方ニ向ひ致奮発候義は、二百年來希有之盛事ニ而、乍恐

聖明之感動被為成候所ニ候得は、此時に当り、

皇国之衰運挽回無之而は、万歳を経候而も、其期有之間敷と不堪激励候得共、兎角不才非力不行届而已ニ而、恐惶不少候処、近来容堂も登城被仰付、廟議参予ニ相成候故、大ニ力を得、精々粉骨罷在候、

御上洛も愈來二月御決定之事ニ而、其節は御宿望之通り、朝廷幕府之御親睦御熟調ニ不相成候半而は、是亦相濟不申訳候得共、

京師之御都合へ甚不案内之義ニ而、目途も相立兼、痛心此事ニ御座候得は、此際之御周旋ニおゐては、偏ニ賢兄之御鼎力ニ無之候而は、決而行届申間敷と申談候事ニ候処、曾而御上

京被成候様

御内旨も有之哉にも致承知候得は、旁御賢勞にハ候得共、御支度次第一日も早く、御上

京相成候様致企望候、左候得は容堂申合せ、従是も上京いたし、於

輦下及御熟談

官武之御合体之基本も皇国万安之大計も、粗希議を極メ

候而、御上

洛を御待受申上候様仕度儀と存候、尤容堂申談し候次第、

此地之形勢等ハ総(高崎五六)而猪太郎之口上ニ譲り、不及委細候間、

御聴取相成候様、所仰冀ニ御座候、何分にも此機会は千

歳之一遇と被存候得は、唯々御上

京、再度之御尽力御座候様、

皇国之御為に翹望依頼罷在候、且又高崎(五六)・岩下(方平)・吉井(友実)之

三士、先般以来精忠尽力不容易周旋共にて、暗ニ幕政

之裨益と相成候義も不少、重疊之感荷之至ニ候得は、可

然御褒詞も被下候様、於劣生所希ニ御座候、楮余之心緒は

来春之面晤を期し候、出仕前草々布字如此ニ候、謹言、

十二月朔日

松平春嶽

島津三郎様

一白、時下御自愛致専念候、吳々本文之趣、宣御聴

受所希ニ候、已上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一八五号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二〇・二糎

包紙原寸 縦三二・四糎

横 一八九糎

横四五・四糎

三二 松平容堂公より島津久光公へ

久光公之奮起を促す

同文二通但一通は久光公真写

一(封筒)島津三郎君

土佐隠士

乞親展 再拜

封 略文龜紙失敬之至、御海涵可被下候、

「(朱)壬戌十二月朔日」

尚々当地之様子ハ、猪太郎より委曲可申上候間不贅

候、吳々御上 京、万事

朝廷之御周旋可被成候、以上、

未得拜顔候得共、一書呈研北候、先以益御安全可被成御

座奉遙賀候、方今天下之形勢

足下委曲御承知之通、実安危之機会此時ニ御座候、来春

ハ

大君ニも御上洛彼是ニ付、足下も御上京可相成、於
關東ハ春岳初

皇国之御為筋、日夜苦心仕候得共、依頼仕候者無之候而
ハ、大事件独力ニ而ハ決而成功之定見無之、何卒

足下御上京之上ハ御互ニ尽力

日本之国是如盤石仕度、是奉対

聖天子候赤心ニ御座候、先ハ右等之儀、大略如此御座候、

書外奉期面尽候、頓首

十二月朔

(山内豊信)
松平容堂

再拝

島津三郎君
座下

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一八四号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・二糎 封筒原寸 縦一七・五糎

横七〇・二糎

横 四・五糎

(他ニ久光ノ真写アリ、同文ニ付省略ス)

三三 松平春嶽公ヨリ島津三郎公へ

国事周旋ノ件

(本文書ハ第三九一号文書ト同文ニ付省略ス)

三四 越前春嶽卿ヨリ近衛忠熙卿への書翰写

久光公召命之件

(包紙ウツ書①)(朱)
「壬戌十二月朔日

越前ヨリ

近衛殿下江被差出候書状写」

」

(包紙ウツ書②)(朱)
「十二月朔日付」

「壬戌」

戊十二月廿二日達ス」

(端裏朱書)
「壬戌十二月朔日越前書状」

写

謹奉捧一書候、嚴寒之候ニ御座候処、倍御清泰被為成御
座、恭賀之至奉存上候、然ハ先達而高崎猪太郎參上仕候

節、段々 御懇篤

御内諭被成候趣、猪太郎より遂一申達、謹而奉拜承難有仕合奉存候、天下危難之秋ニ当り、不学無術之小臣重職ヲ汚シ罷在、奉辱

勅任候儀も可有御座欵と夙夜不堪恐懼候得共、切迫之機會、陳謝仕居候時ニも無御座候故、唯々 皇国之為ニ一身ヲ抛ち、誠赤を以奉報

叡旨と存詰候より外、何等之術計も無御座候、就而は、島津三郎儀は、国忠抜群之者ニも御座候故、此度

勅使を以、被 仰下候御儀茂計議仕度、猪太郎へ申含指越候事ニ御座候、委細は従同人可奉達 高聴と奉存候、此度

勅使ニ付而は、何角御斟酌被為 思召候哉ニも、窃ニ奉窺上候得共、聊被為掛

御念慮候御儀迄無御座候、幕府一層之奮発を添、重畳難有仕合ニ奉存候事ニ御座候、尚此上共不堪之儀は、幾重ニも御警策被成下置候様、奉伏願候、

右は別而御垂諭之御請迄、猪太郎江託し、奉捧一書候、

他は同人之口上ニ譲り、併而奉期不遠上 京拜候之時候、誠恐誠惶頓首百拜、

十二月朔日

越前前中将

近衛殿下

侍執

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一八六号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一六・一糎 包紙原寸 ①縦一〇・八糎 横 二九糎

横 二三・二糎 ②縦三五・五糎 横 四八・六糎

三三 幕府ノ軍制改革

久光公手写

十二月三日

和泉守殿御渡丑御触

大目付

御目付 江

此度御軍制御改正被 仰出候ニ付而は、慶安之度御趣意

ニ基き、御軍役人数等用意可致旨、改而可被 仰出之処、

昇平之流弊ニ而、平生之冗費も不少、非常之嗜難行届向

も有之哉ニ被 思召候ニ付、以後非常之節は、慶安之度

人数割、大凡半減之積り相心得、右人数之内より別紙之

通、御軍役之兵賦可差出旨被 仰出候、委細之儀は、講

武所奉行御軍制掛御目付江可被談候、

右之趣万石以下之面々江可被相触候、

十二月

別紙

此度兵賦之儀、別紙之通被 仰出候得共、上下疲勞之折

柄ニ付、格別之訳ヲ以、三千石以下五百石迄之者は、当

分之内、触面半減之兵賦可差出旨、被 仰出候、尤右高

之者、若兵賦差出候儀差支之輩は、金納ニ而も不苦候間、

兵賦金納共半減之積可相心得候、且又五百石以下之者は、

追而御沙汰有之候迄、兵賦金不及差出候事、

但金納割合方は、御蔵米取同様たるへき事、

十二月

別紙

一 高万石以下百俵迄、兵賦可差出事、

但知行取之分は、五百石老人、千石三人、三千石拾人

之割合を以、兵賦可差出候、御蔵米取并御足高之分、

兵賦は差出ニ不及、金納ニ可致、知行取之分も、五

百石以下并端高は金納之積り、右割合、

一 高百俵より五百俵以下迄、百俵ニ付金貳兩之積り、

一 高五百俵より千俵以下迄、百俵ニ付金貳兩貳分之積り

一 高千俵より以上は金三兩之積り、

但石取も俵取之者と同様ニ相心得、現米取之向は俵ニ

直し金納之積り、尤知行取端高金納之分は本文割合

同断ニ可差出事、

一 兵賦は銃隊ニ組立、陣営ニ被差置候事、

一 兵賦之年比は十七歳より四十五六歳迄、壯健之者相撰

可差出候、尤老人五ヶ年季と定、右年限相立候者、交代之者差出可申候、併主人々々之見込、又は当人共存寄ニ而、継年季申立候儀は不苦候事、

一銘々可成丈知行所之内ニ而、丈高く強壯之者相撰、主人々々ニ於て兵賦ニ被撰候儀は、年来之御恩沢を報ひ候為と相心得、正実ニ相勤可申旨篤と申論、浮薄之弊無之為心得候上可差出候事、

但正実ニ相勤、格別御用立候者ニ有之候は、品ニ寄御取立ニ可相成候間、右之心得を以差はまり相勤候様可致事、

一名目之儀は歩兵組と可相唱候、身分之儀は、勤中小揚之者之次たるへく、尤銃隊江一向ニ御用ひ相成候者共ニ付、平常共脇差而已相帯候様可申付置候事、但勤ニ付候諸道具、衣服等は御貸渡相成、脇差之義も

同様ニ相心得、用意為致候ニは不及候、

一給料之義は主人々々ニ而程能為取可遣候、尤一ヶ年金拾兩を限と致候、右より多キハ不相成候事、

一勤中食料は被下候事、

一金納之分、知行取ハ頭支配ニ而一纏ニ致し、毎年三月十一月兩度、御勘定所江可相納候、御藏米取は三季御米渡之節、其渡高ニ応し引落し、御藏奉行請取印書相添、御切米同米同様可相渡筈ニ候、

一來正月中旬迄ニ無相違兵賦呼寄置、名前、年比、生国等巨細相認取次支配江差出可申候、引渡方等之義は別段達するニ而可有之候、

右之趣可相心得候、

十二月

文書原寸 縦一六・六種 横九九・五種

三六 攘夷勅諭ニ付將軍ヨリノ奉答

(包紙ツラ書)
一上

中左衛門

(朱) 一
「壬戌十二月十三日」

京より差出
「

勅書謹而拜見仕候、

勅諭之趣奉畏候、策略等之義ハ御委任被成下候条、尽衆

議上 京之上、委細可奉申上候、誠惶謹言、

文久壬戌年十二月五日

臣

家茂

花押

今度被 仰出候攘夷之

勅慮、天下江布告仕候ニ付而ハ、御親兵之義御沙汰之

趣奉拜承候、就而ハ、家茂征夷之重任ニ膺り、且右近衛

大将おも兼任仕候上ハ、御守衛之義ハ職掌ニ候間、乍不

肖堅固ニ御守衛等之手配可仕、尚不足ニも被

思召候ハ、諸藩ヨリ召登も可仕候得共、一体外夷を攘

候ニハ、

皇国全地之警衛肝要ニ付、列藩之義ハ国力を為養、九州

ハ誰々、奥羽ハ誰々と申如ク、藩鎮之任お専に為仕候ハ

、可然哉ト奉存候、

仰願クハ此旨被為

聞召分候様仕度奉存候、猶明春早々上

京之上、警衛之方略、具ニ

奏聞を可奉経候、恐惶謹言

文書原寸 縦一六・三横 包紙原寸 縦二七・六横

横六四・五横 横三九・七横

三六 將軍家茂ヨリ朝廷へノ奉答書

攘夷之布告、京師守衛之件

同年十二月十三日京都藤井良節ヨリ鹿児島へ

ノ飛脚便

(本文書ハ三九六号文書ト同文ニ付省略ス)

文書原寸 縦一六・一横 包紙原寸 縦二六・二横

横八五・一横 横三八・四横

三六 三条実美卿ヨリ中山正親町三条両卿へ

幕府攘夷ノ勅命奉行ノ件

(包紙ウツ書)
「三条様御書写」

嚴寒之節

御所方益御機嫌克可被為渡、恐悅存候、抑今日令入城、
勅詔御請有之候、即諸藩江布告之処茂、明日より三家溜
詰伝達相成候趣、今夕春嶽以下入來、書取案等一覽仕候、
猶委曲帰洛之上、言上可仕候、御親兵一条は甚六ヶ敷次
第も有之候、以書中難申尽義ニ有之候間、是又帰京可申
上候、一橋中納言、近日発船浪華江着、上洛ニも相成候
趣ニ候、春嶽も明春早々上洛之趣、噂有之候、当地事情
形勢之義は一々紙面ニ難認候、尚帰京之上可申述と存候、
併先々無異相濟候条、御安意可給候、任便荒々要用計申
上候、宜希上候、仍草々如此候也、

十二月五日

二白、薩守護職於幕府御請ニ相成候、是又帰京可令
言上候、先以 尊王之筋は相立候、安意仕候、惣体
之処は、於愚按は甚以苦慮仕候、心事縷々期拜眉候、
併先々相替候義も無之候、何か不穩時体ニ有之候、
早々帰京万々言上可仕と存候、入夜於燈下認大ニ乱

書、高恕可給候也、

中山殿

実美

正親町三条殿

内密

文書原寸

縦一七・五糎

包紙原寸(二重) 縦二七・一糎

横八七・二糎

横一七・九糎

元 中川修理大夫へ八幡山崎ニ砲台新築ノ

朝命

中川修理大夫

去月廿八日建白有之候船路相開運漕之事、便利之儀ニ
思召候得共、測量以下不容易事ニ有之、未被及決議之処
比日英夷撰海渡来難計風聞も有之ニ付而は、八幡山崎辺
台場新築被
仰付、予防ニ被備度
思召候、右台場御用周旋有之候ハ、

御満足被

思召候事、

十二月

右戌十二月五日夜被仰付

文書原寸 縦一六・一糶 横五一・三糶

000 国事掛任命氏名

国事掛

関 白

兩 役

左 大臣

右 大臣

青蓮院宮

鷹司前右大臣

内 大臣

左 大将

一条大納言

広幡
源大納言

三条西中納言

庭田
源中納言

徳大寺中納言

六条
宰相中将

柳原
別 当

大原
左衛門督

長谷三位

河鱒
公述朝臣

東久世
通禧朝臣

姉小路
公知朝臣

裏辻
公愛朝臣

橋本

実梁朝臣

万里小路
博房

勘解由小路
資生

文書原寸 縦一五・九糎 横八二糎

四二 大坂銀主出銀請書

御請書

一金七万五千両

但来亥年中出銀

右今日御頼談被為 仰出奉畏候、何れも無御扱御入価
之御廉々奉承知、何共奉恐入候ニ付則御請申上候、以
上、

十二月九日

炭屋安兵衛

神田彦兵衛

浜村孫右衛門

森本櫛之助

白山彦五郎

高木五兵衛

文書原寸 縦一四・四糎 横五一・二糎

四三 小松帯刀ヨリ中山大久保へ

暁姫様帰国ノ件及中川宮等

於其御地

上々様御機嫌克被為 入候半と恐悦奉存上候、於爰許
御姫様方御機嫌克被遊 御滞坂、恐悦御義御同慶奉存
候、

一御姫様方、京都両日御滞在之御賦御座候処、暁様少々
御風邪ニ而、殊之外御滞留御日込ニ相成、去ル六日京
師御発興、伏見御止宿ニ而、一昨七日大坂江
御着ニ而、御機嫌克被遊 御滞坂、明後十一日当地御
発足之御賦ニ御座候、

一京都江去月廿六日

御着ニ相成、三日より御全快ニ而、清水・祇園・丸山

端療舞

御見物等被遊候、同四日ニは、

近衛様より被遊 御參殿候様被仰進候付、御旅粧之事

ニ而再往御断被仰立候得共、

障様ニは御歌之御門弟、其上亦と御上 京も不被成事

候付、強而 御參殿御座候様被仰進候付、四ツ時より

障様御參殿ニ而、夜入四時分御帰殿ニ御座候、

寧様ニは御断ニ而、御出無御座候、同五日嵐山・北野

江御出ニ相成申候、六日五時京都

御立ニ而、宇治江被為入、夜入過伏見江

御着、其外は別段申上候義無之、御滞京等之御次第

御兩殿様為御安堵申上越候、

一兵庫辺より蒸氣船江 御乗船被為在候様と之趣は、其

元出立之砌致承知、其上我々共ニも其方ニ被遊度奉存、

江戸表ニ而も細々申上候得共、中々六ケしく御座候、

段々先便申越置候通ニ而、浪花辺之間ニ、是非

御乗船之方ニ御進メ申上考ニ而、昨日迄も精々申上候

得共、段々御苦情之説も有之、其上

寧様之所、一昨日川御下りさへも漸御乗船被為出来候

事共ニ而、実事六ケ敷御訳合ニ御座候、邂逅

御兩殿様より御手厚被仰上候義も有之、甚御氣之毒ニ

被 思召上候得共、此義丈は御断被仰立候付、無扨中

国路御通行之筋ニ被仰出候、永平丸は御国元御用之御

荷物、当所よりも御積込ニ相成、廻船申渡置候付、当

月末方迄ニは、着船可致相考申候間、其段御申上可被

成候、

一京師表当分先静謐ニ御座候、併段々少々之事共は有之

候ニ付、左ニ申上越候、

一青門様(翁様御王)先程より之御煩、いまた御全快不被遊、本田・

藤井抔大心配いたし、当分志々め猷吉御菓煮し方ニ、

かの御方江差上申候処、今比ニ相成至極能キ御塩梅ニ

而、もうは決而御懸念申上程之事ニは無御座候、

一前条御煩ニ付、御菓鍋黄金を以作候が御入用之事ニ而、

本田抔より林休左衛門江引合、大坂表探索いたし候処、

黄金茶碗等は脇方より見出、直ニ

三郎様より被進趣を以差上置候由、今一ツ之鍋は浜村孫右衛門持合之金ニ而製造いたし、進上仕度申出候付、是以

御進上之趣を以差上候処、至極 御満悦ニ而、此節小子參殿之砌も、厚く御挨拶等被仰下、且

三郎様江も厚御礼等申上越候様、致承知申候間、其段御申上置可被成候、巨細之次第は本田より可申上越候、

一 青門ニ茂栗田御殿は御所よりも御遠方、其上議奏衆御政事御相談御出旁不宜敷候付、

関白様御世話ニ而、去月晦日ニ輪王寺御里坊へ御引移ニ相成、当分かの方江御住居御座候、是は全体能キ場所ニ而至極御相付、夫より御塩梅も宜鋪被為成、恐悦奉存候、右

御引移等ニ付、此方より人数御借用被遊度、細々被仰聞、是は全体先より

御沙汰も被為 在候御趣意ニ而、混と御借用被遊度と

之御事ニ御座候得は、何分左様之人物も無御座候付、新納嘉・松元勘兵衛・永山信右衛門・西田次右衛門・川井田藤之進・中村彦左衛門、右人数繰廻、隔日ニ相勤候様申渡

御引移り当日よりかの方江差上置候、只今之処は差掛之事候付、其通計ひ置候得共、御国元江申上候而、三郎様思召も被為 在候ハ、其段可申上旨、拙者よりも申上置候、長より人数差上候様な模様ニ而、宮様も大ニ御配慮被遊、其外旁差上度候方可然奉存候付、右之通取計置申候間、其段御申上置可被成候、是も本田より細事可申上候、

一 関白様御方江も此節両度程拜謁仕、段々朝議之事共、致承知候処、御案内通色々一決不致事共も有之、大ニ心配仕候、併

殿下・青門様之御所は実ニ御確立ニ而、夫丈ニ而、先難有事ニ御座候、中・正は別段相替候事も無御座候、一殿下、青門様ニも

二丸君御上京之義、類ニ御待ニ御座候而、精々早目御上京相成候様、御沙汰も御座候付、先便被仰越候御趣意を以申上置、関東一左右次第ニは、早々上京可仕候付、かの方之模様相分次第、御沙汰願置候付、分次第ニは本田より飛檄を以、其段申上候様申置候、何分御上

京不相成候而は、朝議旁実は一決不致訳ニ而、下ニ而も大キニ心配いたし申候、しかし御趣意ニ基キ御答等は申上置候事ニ御座候、

一御守護職之義被

仰出、誠ニ恐悦何共奉大慶、此節

殿下様より致承知候へは、実ニ不被止之

叡慮ニ被為、在候由、誠ニ何とも申上様無之、御冥加之御事と奉存候、

一太守様御参勤 御猶予之所は、直様関東江 御沙汰ニ相成候段承知仕候、是は其通不相成候而は不相済訳、関東表へも岩下等江周旋之事共申越申候、

一橋上京之義も未相知不申候、

一三郎様御上 京ニ相成候得は、錦之御屋しき御手少く、其上御供方之宿旁込入候付、粟田御借用相成候へ、可然と申談、内々申上候処、何も御差支不被為、在候付、拙者ニ茂差越、かの方致見分候様被仰付、藤井同道ニ而差越申候処、御座向は別而よろしく御座候付、御借用之筋ニ申上置候、い細は罷下候而可申上候得共、其内形行申上越候、

一阿州当分上 京ニ相成居申候、格別之事も無御座候、是は無事ニ御座候、六日ニ

宮ニ参殿いたし候処、阿州家老蜂須賀駿河逢度と之事ニ而、面会いたし候処、格別之事も無之、只無事ニ御座候、中川様一条も御座候付、是は本田より次第可申上候、

一関東之事情は先便より申上候通ニ御座候処、拙者出立後、段々下之議論も相立、板倉出仕差止ニ相成居候処、一橋公類ニ御議論も相立、越・土之振はまりニ而、又

々仕仕ニ相成申候由、此節は余程宜敷と承申候、しかしは何とも難申上候、

一橋もしはらくハ御引入之由候得共、是も御出ニ相成候由承申候

一勅使も去ル三日ニ

御出立ニ而、御帰 京之様承申候、

勅使之趣は、無故御請ニ相成候事と相考申候、未京都江は為何事も不申参候付、安心は出来兼候得は、十二八九迄は相違無之と相考申候、

一一橋公何分幕弊ニ御動揺之様承、安心出来兼候付、越

前公上 京被仰出候方可然申談、其段建白いたし置申候、弥上 京之比合相分候ハ、

二九公茂御発駕ニ相成度奉存候、何分天下之安危此節

ニ御座候間、兎角大尾御決定被下度事ニ御座候、

一先便兩度 御趣意之事共被仰越、い細致承知候、御答

ニ不及義ハ不申越候、

一京都守衛方之所、差当何そと申訳も無之由候得共、何

分長滞在ニ相成候得は、色々故障之事も有之由候間、

爰ニ而は三十人位も被差登、交代被仰付可然、今成ニ被召置候而はつまらざる事、眼前ニ御座候間、何分其方ニ御吟味有之度奉存候事、

一大坂御留主居は、御人撰ニ而早く被仰付度奉存候、

一御金談之事共は、摂津殿方江申越候付、別段不申越候、右之外細々申上越度事件も御座候得共、格別差急候訳ニも無御座候付、近々林休左衛門御米老条等付、差下申候付、当人江申込候而可申候間、御聞取可被成候、

此節は京師

御滞在御延引、且永平丸御乗船不被遊事共、早く不申上候而、如何計御待も被為入、其上前後之御都合ニも可相懸候付、御中途迄参り居候飛脚差返申候間、左様御含可被成候、今日も御金談事ニ而、拙者御長屋江御銀主共召寄、示談旁ニ付、細々書認不申候、先は此旨申越候条、可被達貴聞候、以上、

十二月九日

小松帯刀

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

追而申上候、寒中之御御精勤之筈珍重奉存候、小子
ニも無異奉随從申候間、御休意可被下候、当年之寒
氣中々敵しく、此比は大かた雪ニ御座候、しかれば
其御地之御所置追々致承知、誠ニ感心ニ御座候、只
今は人心之居合も相付候由、誠ニ

上之御誠意相立候故之事と奉恐入候、此節は別段書
面も得不差上候間、御高免可被下候、先便より度々
御書之御礼も申上候、先は折角時季御保養御勤務被
成度奉存候、此旨私之事迄御用中ニ書認、真平御海
怨奉希候、何も細事後便迄申上居候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一八九号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・三糎 横六九〇・三糎

一三 京都小松帯刀ヨリ中山大久保へ

松平春嶽上京、高崎猪太郎帰国ノ件

越上 京之事、高猪罷下候義共、本田より細事申越候条、
宜しく御願申入候、蒸気船より高猪差下申候、差急荒増
申越候、以上、

十二月十一日

小松帯刀

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六糎 横二六・一糎

〇四 西之宮中山次左衛門ヨリ京都小松帯刀へ
江戸姫君帰国ノ途次播州浜巡覽ノ件

〇五 藤井良節ヨリ中山大久保へ

久光公京都守護職ノ件并粟田宮御建立ノ件

極々火急之御内沙汰ニ付、要条而已左ニ申上候、昨日
従

勅使、御左右有之、別紙之通被仰進候、然処、今日參殿仕候処、從諸司代表向御届有之候は

三郎様御守護職之義、別段之以

叡慮被 仰出、於大樹家無異儀奉畏候と之御届振ニ御座候由、

殿下御直沙汰ニ御座候、尤早々申上越候様被

仰候ニ付、大急ニ而申上候、

一橋公上

京之義も同様、從諸司代御届ニ相成候由、御沙汰ニ御座候、

右二条御届書申下ケ、写差上可申之処、間ニ逢不申、

三条様御書のミ御写頂戴、差上申候、

右宜敷御披露奉願候、

一粟田宮御絵図面一紙、今日御渡しニ相成申候間、差上申候、奉備高覽候、

右は弥御借し渡し相成筈御座候間、自然直様御着相

成申義ニ御座候ハ、何分早々御先ニ被仰越被下候

様仕度奉存候、同宮御内御家来家々五六軒は、随分

御明ケ被下との御事ニ御座候、山田勘解由居宅をも

差出可申旨、当人より承申候、何も御差図を待候、

扱小松家御急ニ付、跡御念遣之由ニ而、本田・村山

とも御供被仰付、跡周旋其外小臣耆人ニ罷成、御存

通之不束もの、誠ニ心配此事ニ御座候、しかし、鶴

木・上田申合相勤候様、帯刀殿御沙汰承り、先難有

奉存候、高佐ニは最早道中欵と奉察候へ共、自然御

指留共ニ御座候ハ、吉・仲一同上

京之処、御周旋偏ニ奉伏願候、此節飛脚耆人ニ而奉

恐入候へ共、誠ニ無人無抛、右之通取計申候、尤至極

御趣意も奉汲受、元氣之者ニ御座候故、別段を以決

心取計申候、何も差急き如是御座候、以上、

十二月十三日 藤井良節

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六・一糎 横二〇・六糎

四六 藤井良節ヨリ中山大久保へ

將軍及一橋公上落ノ件

(端裏書)
「当月十三日立

京師より飛脚」

只今飛脚差立申候処、無程土州平井収二郎来訪、今夕方
土藩高崎鉄磨外ニ老人、当月七日江戸発足ニ而上
京いたし、別紙持参、第一ハ 容堂公茂當時上

京見合、大樹公上

洛之節供奉同様ニ而、引続上 京ニ而可然旨

御内沙汰、当月六日ニ関東へ相達シ、全体正月七日比ニ
は必ス上 京之発足と内決及相違候とて、家来共始大ニ
不腹、夫故別段御召之

御沙汰内願之為、兩人上 京と申事ニ御座候、何等之
御失議ニ而右様御運相成申候哉、一向不存知事ニ而驚入
申候、

別紙之次第ニ付、屹と尽力周旋、別段

御沙汰被為在候処ニ運ひ付申候処奉存候、

一 一橋公ニは、当十五日比乗船出帆と申事ニ決し居申候

由、左候而、大坂着之上、一往 城内へ被居、

住吉辺より大坂川口・兵庫辺迄、台場築方等惣載有之

筈之由ニ御座候、御勘合ニも可被為成義と奉存候、早

々、追而大急を以申上越候、不行届之書面、御推覧奉

希候、以上、

十二月十三日

藤井良節

中左衛門殿

一 藏 殿

二 白

勅使ニは、弥七日ニ江戸

御発駕相成候由ニ御座候、

文書原寸 縦一六・三種 横一三三・四種

○大久保一藏ヨリ桂右衛門へ

攘夷ノ勅使東下ノ件

別紙一昨夜仕出候賦有之認置候得共、御用封今晚ニ延引、其まゝ差上候付、御推読可被下候、委曲申上度候得共、早朝より夜ニ懸色々多忙、其儀相叶不申、何も期拜接候、以上、

十二月十六日

一藏

桂様

文書原寸 縦一九糎 横一七・二糎

京州御勢ひ、日々盛大相振ひ、転法輪・三条様

勅使御下向、姉小路様副使被差立、断然攘夷之義奉行相成候様と之

御趣意ニ而、畢竟長州・土州合体にて建議之処より、

全体之

叙慮ニ被為 在候得は、自然

朝議右ニ御決定之御儀ニも可有之候得共、此一条ニ就

而は、実ニ

皇国之重事ニ而、眼前之勢ひニ御転移被為 在候様に
てハ甚不可然御事ニ而、只今之処、大変革之始、復古
之大業成否之際ニ相関り候機ニ御座候得は、克々始終
之見居被為立、事之利害得失、人心之向背去同を洞察
し、永世不朽之治体、屹度相居り候義肝要御座候処、
時世ニ応し、大小軽重取捨之御処置ニ暗ク、前後顛倒
之差寸分有之候而ハ、実ニ治乱之大事ニ相懸り候半、
於関東も十分奉

勅之浅深も相見得、既ニ来二月上 洛御発ニ相成候得
は廟議之深意も可有之、尤列藩よりも開鎖之論紛々、
終ニ両立之勢ひも相見得、末如何と懸念之簾も有之折
柄

勅使被差立候上へ、是非其实不被行候而は不相済訳ニ
候而、旁彼此之勢ひ細詳熟察いたし候得は、返而一混
雑を醸し候機ト相成、

御趣意反覆之憂到来案中ニ御座候、故ニ

三郎様云々

御建議被遊置候御事ニ有之形勢ヲ以スレハ、攘夷ノ論

ハ御安ク候得共、現事ヲ以スレハ、前条之憂不一方、

只趣意ハ同ふして寛急之違有る迄之事ニ候、就而は来

二月上

浴之上、親鋪被

仰出候而御至当之訳ニ可有御座候間、篤と被及勘考建

議相成度、
被為在

御趣意ニ於テハ、今更

御変り不被為 在候得共、問、右之趣意而建白ニハ前条通

御模様 御伺之上ハ、
不及候得共、若

御黙止難被 御尋も被為 在候ハ、前条之趣ニ而

遊、右之趣御懸合申上候様被
被及言上候様

御付候、
御沙汰ニ候

文書原寸 縦一六・三糎 横一五六・八糎

○ 島津登ヨリ山口直記谷川次郎兵衛へ

同年十一月攘夷ニ関スル南部弥八郎ノ建言添

四〇八ノ一

〔表紙〕

上

南部弥八郎

極密奉申上覚

攘夷之儀は、先年より之

叡慮ニ被為在候趣ニ付而は、素より可奉違背筋無之、抑

政權武家ニ帰し候後は、

朝廷恰茂縷之如く、只

皇統被為存候のミニ御座候処、当春御英断御周旋被遊候

以来、数百年闡滅之

皇威赫然と相輝候ニ付而は、此機会ニ被為乘、

天朝御興復之大体可被遊御立と奉恐悦候、然処、外夷内

情之趣、追々探索申上候通、関東は日本之真主ニ無之儀、

既ニ察知仕候段、箕作阮甫翻譯仕候英吉利之商人建白書

ニも巨細ニ相見得、又西洋より差越候算作秋坪等之書状之趣ニ候へは、早晚

帝都江条約之儀奉願候ニ相違有御座間敷と奉存候、左様御座候時は、御所置之得失ニより、不容易事柄ニも至り可申と心痛罷在候、既に一定之御廟算を被為決、臨機之御策略数多可被為設御儀ニは奉存候得共、聊存付候愚策之趣、左ニ申上候、

一使節大坂等江着船之節、列藩江

勅命被成下、整々堂々之勢を張り、

朝廷より智勇沈実之上将ニ命せられ、応接せしめ、

礼節を以寛々と彼か要求を絶し候ハ、彼ミつから

犯すへからざるを知て、偏に条約のミを奉願候時ニ

いたり、是迄之条約を改めて、

御国威の相立候様にし、兵庫を開らき、其交易場之

所置は

京師の御取扱ニ被 仰付、護衛之設は列藩より差出し、十分之趣法を建て京摂を潤沢す、随而関東江

勅し、他之三港之条約をも改革せしむ、

二京摂之兵備を十分にし、其要求を拒絶し、彼不遜を發するを待ち、不得已の時にいたり、血戦して彼か勢を挫き、畏服するの後、開鎖其時之宜ニ随ふ、三幕府に 命せられて、頻に要求拒絶を促し、只管

皇都非常之軍備を充実にす、

右第一策之儀は、自然戦はずして敵を圧する道理ニ相当

皇威灼然として 御徳光万邦江相輝、蛮夷賓服之形勢ニ

も相成可申哉、第二策之議は、最愉快ニは御座候へ共、

構兵数年ニいたり候時は、不容易事柄ニも至り申へく、

第三策ニ至候而は、

朝廷におゐて万々御危殆は不被為在候得共、

皇威御更張之期ニは至り申間敷奉存候、何卒最大の

御英決を以、此機会不被為失様奉願候、畢竟攘夷拒絶

之

叡慮も 皇威御違遲を被為復候

思召ニも可被為在哉と、乍恐奉存候、先般被

仰出候 御旨趣も被為在候ニ付、此段不願死罪申上候、
以上、

戊十一月 南部弥八郎

冊子原寸 縦二六・五種 横一九・三種 五枚

四〇八ノ二

(包紙ウツ書)
上

中小姓南部弥八郎より、攘夷之儀ニ付存慮之趣、別紙之
通拙者迄内々申出候、就而は、格別御見合可相成程之儀
茂有之間敷候得共、当分外方聞合等茂、為被仰付置者ニ
而、適申述候志之程難黙止候付、別紙相添、此段御内用
を以申越候条、

太守様

三郎様達

御内聴候儀共、何分茂可取計候、已上、

戊十二月十七日

島津 登

山口直記殿

谷川次郎兵衛殿

文書原寸 縦一四・三種 包紙原寸 縦二八・九種

横六七・一種 横四一・六種

江戶岩下佐次右衛門ヨリ中山大久保へ

江戶ノ情況及久光公上洛ノ件

(端裏朱書)

壬戌十二月十七日 江戶岩下

四〇九ノ一

今日急被差立候付、一書申越候、其御地乍恐
上々様方御機嫌能被為入、恐悅御儀奉存候、爰許当分平
和也、兩

勅使ニも 御都合能、去ル七日御立相成候、十五日ニ一
橋公御立御上京、大坂海岸御警衛向御見分之筈也、閣老
小笠原(長行)書頭様其外御旗本衆大勢迄御取添、是ハ同日蒸
氣船より御通□追々幕習も一洗之時節到来相成申候、
委細之義は、高崎猪太郎罷下候間、御聞取被成候筈、其

後差而相替候事無之、攘夷 御親兵之兩条も、過日列候
江布告相成申候、

三郎様御上京御都合比合を、毎々(松平慶永)越老公御尋ニ御座候、

昨朝佐土原侯越公へ御出候処、至極

三郎様御事ニ感服之様子相頭候由御座候間、先便も申越
候通、何卒正月十日方迄之内ニは、是非〳〵 御上京不

相成候而へ、(島津忠寛)天下ノ大業も破れ候勢御座候間、御尽力

可被下候、〇佐土原公明後十九日 御出立、 御上京之

賦御座候、〇松木弘安も、(寺島宗則)過日致帰府候得共、いまた逢

不申候、兩日中逢候賦御座候、彼地大抵之事情へ、表通御

問合へ相成候欤と相考申候、頻ニ異国之軍備充実を賞揚

いたし候由御座候、実事左様可有之事ニ候、〇諸藩追々

振ひ立候、尾州も余程宜敷相成候、近々老公 御上京之

筈之由、会津も申候、長州矢張諸藩より不被信候、筑前(黒田)

様ニはいまた拜謁も出来不申候、御議論も何とか一定無

之様子ニも相伺申候、如何之次第ニ候哉、相分兼候、先

は右方申進度如是御座候、猶追々細事可申越候、以上、

十二月十七日

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

岩下佐次右衛門

四〇九ノ二

先達而 大赦被仰出、日下部父子・有村も無御構ト

申事ニ相成、改葬之筈御座候、水府ノ鮎沢伊太夫も

御赦免相成候由、近々罷帰筈之由、水府ニ而大場・

武田・岡田復職、白井・尾崎・吉田御役御免相成候

由、彼方有土中へ可引合旨、先日懸合候得共、いま

た逢不申候、近日中亦々相懸、執政へ致面会、御屋

敷へ集居候三十余人之議論も可致と相考候、〇此度

一橋公ニ從而武田も致 上京との事、慥ニハ不承存

候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一九〇号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六糎 横二一七・二糎

鹿兒島県史料編さん関係者

顧問

質問

国立国会図書館
客員調査員

大久保利謙

前早稲田大学教授

竹内理三

東京大学
史料編纂所所長

益田宗

委員長

桃園恵真
四本健光

田島秀隆
芳本即正

五味克夫
桑波田興

原口哲哉
安藤保

副館長

井之口恒雄

調査史料課長

稲恒淳二

島中彬

大平義行

尾平義彬

荒田直子

長嶺泉子

森脇由紀

宇都宮良和喜

鹿 児 島 県 史 料

玉里島津家史料 一

平成 3 年 12 月 1 日 印 刷

平成 4 年 1 月 22 日 発 行

非 売 品

編 集 鹿 児 島 県 歴 史 資 料 セ ン タ ー 黎 明 館

発 行 鹿 児 島 県

印刷所 合名会社 文尚堂印刷所

〒892 鹿 児 島 市 西 千 石 町 1 - 8
